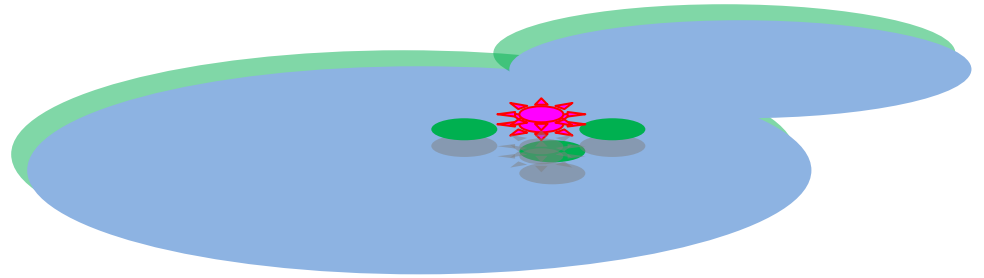


しゅう せん か にっ き
周 旋 家 日 記
乾 明 紀



私が、このマガジンを発行する対人援助学会に関係したのは、準備会からだったと思う。当時私は、京都造形芸術大学のプロジェクトセンターの教員で副センター長の目的であった。社会が抱える様々な課題を「アート」と「学生」の力で解決しようというのが、京都造形芸術大学のプロジェクトセンターであった。社会とは、地域であったり、行政であったり、企業であったり、病院であったり、寺院であったりと様々であり、そこが抱える課題も「まちづくり」から「業績向上」まで様々であった。しかし、共通して言えることは、アートと学生の力で、世の中が必要とする「価値」を生み出していくことであった。

私の仕事は、地域から寺院までに至る様々な社会と学生をつなげ、価値を生み出していくことであった。ある集団や組織は、長年の活動の中で、良く

も悪くも「文化」や「ルール」に支配されていく。その文化やルールが世の中との関係において、価値を生み出せなくなったとき、その集団や組織は存続の危機に陥る。その存続の危機に光明を灯すべく、社会と学生をつなげ、新たな発想や仕組み、製品などによって、世の中との新たな関係性を創りだすのが、教員としての私の仕事であった（当然、これ以外にも、学生に「つなげる」や「アートを世の中に活かす」方法を学びとらせるなどの教育者の仕事もあるし、それがどのようなロジックで起きるのかを理論化するという研究者としての仕事もあった）。

「つなげる」という仕事は、孤高の芸術家が自らの思想と手によって作品を創り出す行為とは異なり、他者との関係の中で価値を紡いでいく行為である。いつの頃からか、私は「つなげる」という行為が仕事の中心になっ

ていった。芸術大学の教員へのお誘いがあったのも「つなげる」行為を実践していたからだ。さらに、私自身も「つなげる」仕事を通じて、世の中と心地よく「つな“が”る」ことができている。このマガジンでは、「つなげる」行為について徒然に綴っていきたいと思っている。

さて、この「つなげる」を仕事にしていると「コーディネーター (coordinator)」と呼ばれることがある。手元にある英語の辞書で引いてみると、『同等 [対等] にするもの [人]、調整するもの [人]、(企画推進などの) 責任者、まとめ役』などの意味があった。ちなみに、平成 14 年におこなわれた文化庁の調査では、認知度が 24 位の外来語である (同調査では、23 位がコスト、25 位がコーディネート、26 位がリスク。なお、1 位はストレス、2 位はボランティア)。9 割近い日本人が知り、6 割近い日本人が正しく意味を理解しているこのカタカナ語は、日本語になりつつあると言えるが、そんな外来語である「コーディネーター」と呼ばれることが多い私だが、昨年の秋ごろから、友人とカタカナ語を卒業し、「周旋家」を名乗るようになった。よって、このマガジンでは、「周旋家日記」と称し、私の周旋活動について語ろうと思っている。

「周旋」とは、手元の『広辞苑』によると『①たちめぐる。ぐるぐるめぐる。②事をなすために立ちま

わる。世話をすること。取持ち。斡旋。③ (good offices) 国際法上、第三国が外部から紛争当事国の交渉を援助すること』の 3 つの意味がある。私と友人は、『事をなすために立ちまわる。世話をすること。取持ち。斡旋』のスペシャリストでありたいとの思いから「周旋家」と名乗るようになった。

ちなみに、日本の歴史上において、「周旋家」として期待され、それに最も応えた人物をご存じだろうか。それは、伊藤博文である。吉田松陰から「才劣り学幼き、素直にして華なし」と酷評されることもあった伊藤博文だが、「利介亦進む。中々周旋家になりそうな」との期待どおり、幕末は四面楚歌の長州藩で、明治維新後は内憂外患の新政府において、周旋力を大いに発揮した。私が友人と「周旋家」を名乗ったのは、二流と言われながらも難局を乗り越え、事をなした伊藤公にあやからうとしたからである。

さて、「周旋家日記」というタイトルの理由を述べるのにここまでかかったが、周旋に関する出来事をひとつは書いておこう。今回は最初の日記なので、私個人が周旋という行為が好きになるきっかけをどうしても書いておきたくなった。

私は、高校 2 年生になってアルバイ

トを始めた。野球部を怪我で辞め、比較的時間があつたので、友達に誘われ、こっそりと始めた。最初はファミリーレストランだったのだが、長期休暇に入り、近所の洋食屋さんでアルバイトをすることになった。カウンターがある割烹のような造りの小さなお店だったが、ハンバーグやオムライスがおいしく、昼時は繁盛していた。私の仕事は、(慣れてからであるが、)フライを揚げ、ランチを盛り付けつつ、大将のオムライスを巻き終わるタイミングで皿を渡しつつ、キャベツや玉ねぎをお客さんの様子を見ながら刻みつつ、注文を聞き、お勘定をいただき、ときに出前を運ぶことであった。

ファミリーレストランのマニュアル中心の環境では萎縮しがちな私であったが、洋食屋さんの環境はとてもあった。忙しくなったら時給を少し上げてくれるのも嬉しかったが、それよりお客さんと大将の反応が嬉しかった。キャベツや玉ねぎを刻みながらお客さんの様子を伺い、「注文か」、「お勘定か」、「おかわりか」、「世間話か」を状況を見ながら判断し、速やかに反応することが楽しかった。2つ以上のことを同時にできている自分もかっこいいと感じていたし、何よりお客さんのニーズにすぐ答えることで、常連さんや大将から可愛がられた。何かをしながらカウンター越しにお客さんの様子を伺っている瞬間は、自己効力感が湧いてくるような心地よさがあった。結局、このアルバイトを私は大学

を卒業するまでの6年間続け、卒業の際には弟に引き継いで終えた。

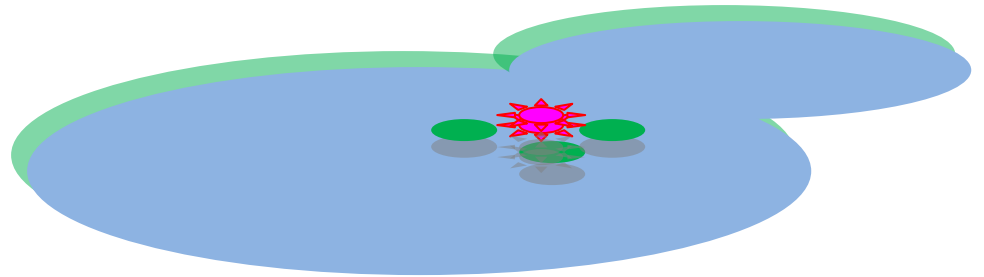
このとき身に付いた他者への想像力や状況判断力、複数の仕事を同時にこなす対応力や速やかに反応するという瞬発力は、人を「つなげる」という周旋に大いに役立っている。これらの力は、すべて洋食屋さんのお客さんや大将の反応によって高められた。これには本当に感謝している。常連さんの中には就職しないかと声をかけてくれる人もいた。才劣り学幼き私が、こうして周旋家になれたのは、当時の温かい反応のお陰である。このマガジンで連載を始めるにあたって、どうしても書いておきたかった。次回からは、就職後の様々な「周旋」について書いていくこととしたい。

しゅう せん か にっ き

周旋家日記(2)

仏教との再会—退蔵院襖絵プロジェクト

乾 明紀



新しい価値づくりのために人を紹介したり、想いをカタチにしたりするために人を支援する「周旋活動」は、私自身が主役にならない場合が圧倒的に多いものだ。自分が主役にならないことについて、私は人間が出来ていないので、寂しい想いや悔しい想いをすることもある。しかし、その一方で、それまでの私が持っていなかったビジョンや価値観に出会う楽しみがある。また、私が知らない世界のことを非常によく知っておられる「その筋の専門家」の方の想いをカタチにすることは非常に刺激的だ。どんなに手間暇がかかっても周旋活動につい手を出してしまうのは、この出会いが楽しく、自分を大きく成長させてくれることを脳が記憶してしまったからだろう。

「その筋の専門家の想い」が非常に魅力的であれば、「想いをカタチにしていく」という援助行動は強く駆動される。そして、その過程で私は大きく学ぶのである。私にとって大きな学びとは、他者の価値観を自らに取り入れることと、オーダーメイド的に実行される「想いをカタチにしていく」援助行動を通じて、自らの手で方法論を発見していくことである。この2つがたまらなく面白い。余談だが、この面白さを教育の仕組みの中に入れようとしているのが、サービス・ラーニングというものだろう。立命館大学にも2008年にサービス・ラーニングセンターというものが立ちあがったが、私もサービス（援助）しながら、大いに

ラーニングしているのである。

さて、私にとって周旋活動は、事の大小を問わず常に自分を成長させてくれる存在であるが、ときに私の人生に大きなインパクトを与えてくれるものがある。ここ最近の周旋活動の中にも、そんな予感を覚えたものがある。それは周旋活動を通じた「仏教との再会」である。

「再会」としたのは、私は子供のころ浄土真宗の寺院を拠点にボーイスカウト活動をしていたし、前々任校は、佛教大学だったからである。しかし、深く仏教に帰依していたわけではなく、浄土教についてもほとんど無知と言っても過言ではない人間だった。そんな私が、仏教と本格的に再会したのは、2010年に、妙心寺の塔頭、退蔵院の副住職と京都市が主催するある審査会でご一緒したご縁であった。

私と副住職は、京都市の未来像をアートやデザインの力で政策提言されたものを評価する審査員であった。当時、私は京都造形芸術大学の教員で若手アーティストの支援活動（これもナカナカ面白い取り組みだったので、それは紹介したいナ）をしていたので、そんな活動を紹介したりしながら副住職と話をしていると「うちのお寺には慶長年間の方丈に、慶長年間の襖絵があるのですが、これは重要文化財であり、常に外に出しておくとうるさく傷んでしまいます。だからといって襖を外して

おくと耐震的にも弱くなるので、普段は、白い襖をいれているのですが、それでいいのかって思うのです。だから、芸大生に何か描いてもらうことってできないですかねぇ？」ということをおっしゃった。周旋家の血が騒ぐ瞬間である。仏教との再会はこんな会話から始まった。もちろん二つ返事で「できますよ！」と答えた。

早速大学に戻り周旋活動に入った。私は周旋とマネジメントのプロだがアートの専門家ではないので、その筋の専門家の知恵と実践を借りなければこの企画は完成しない。京都造形芸術大学は、感度の高い教員が多いので、周旋に全く苦労はなかった。私の上司であったプロジェクトセンター長に相談し、現代アーティストの椿昇氏をディレクターに迎えた。芸術と社会の関係をストイックな姿勢で考え続け、創作活動をしている椿氏は、「パンクなアーティスト」（山口,2002）とあだ名される人物であり、最初から鼻息が荒かった。

周旋活動には、消極的な人を積極的にするところから周旋する場合と積極的な人同士を周旋する場合がある。今回は、100%後者だ。ストイックに価値創造をする喜びを知っている「禅の専門家」と「アートの専門家」の出会いは、周旋家という触媒が必要なかったかのように化学反応を始めた。私はいつのまにか周旋家から傍観者になっていた（マネジメントはしていた

が…。傍観者になれるのが最高の周旋なのかもしれない。

禅とアートは、いずれもが行動を伴いながら、世俗的なものからの超越を目指すものである。前者は厳しい修行を通じ、後者は売れる保障のない創作活動を通じそこに至ろうとする。そんな両者の融合が、社会的地位を超えた、最高の価値の創造に向かうのは必然であろう。副住職は、「自分の目が黒いうちには価値がわからないものを創りたい。この時代では評価できないもの、100年先の未来に残るようなものが残せたら」と語った。これが、今回のプロジェクトで求める作品の質となった。

一方、アーティストでもあり、大学教授でもある椿氏は、この取組にある狙いを持っていた。「欧米ではアートは市民の買って飾るという自然な楽しみに支えられていますが、日本では明治以後『芸術』は特別なものとされ、市民は遠ざけられてしまいました。結果的に若い画家が生きてゆけないという19世紀までの日本は考えられない貧弱な環境」になったことを嘆き、「京都という歴史のある土地に眠っていた歴史的資産と芸術系大学やアーティストが集中するという状況を融合させ、多くの若い画学生に誇りと夢を与え、欧米マーケット主導のまま内需システムを構築できなかった我が国のいびつな状況に一石を投じる」（椿,2011）ことであった。「いろんな

人に勇気を与え、社会を活性化する。あなたはなにしろクレイジー！」（山口,2002）とも言われる椿氏である。この取組も彼にとってはひとつの作品であり、内なる想いが爆発していた。アーティストのモチベーションと禅の関係について、仏教学者の鈴木大拙（1940）は、次のように述べている。「芸術的衝動は道徳的衝動より原始的であり、生得のものである。芸術の訴える力は端的に人間性に食い込む。道徳は規範的だが、芸術は創造的である。一は外部からの挿入で、一は内部からの抑えがたい表現である。禅はどうしても芸術と結びついて、道徳とは結びつかぬ。禅は無道徳（unmoral）であっても、無芸術（without art）ではありえない」。

傍観者になった私には、副住職と椿氏が私にとっての老師だった。そして、2人の言動を通じて、お釈迦様が私に「お前はどこに向かって生きようとしているのか？」と質問されているように思えた。

鈴木大拙（1940）『禅と日本文化』北川桃雄訳、岩波新書、

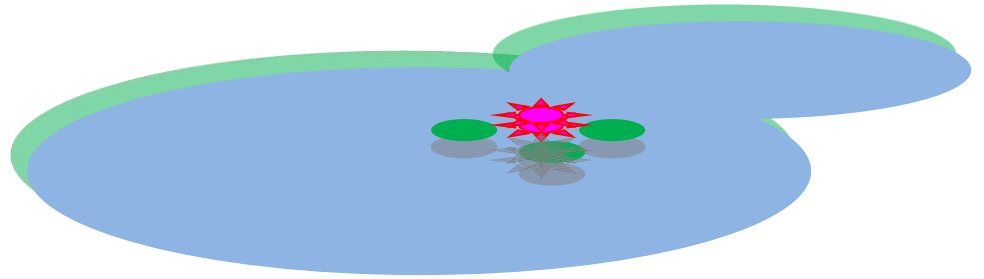
椿昇（2011）『退蔵院 21 世紀障壁画プロジェクト企画書』

山口裕美（2002）『現在アート入門の入門』、光文社新書

しゅう せん か にっ き
周 旋 家 日 記 (3)

それぞれの想い—退蔵院襖絵プロジェクト

乾 明 紀



前号では、このプロジェクトを通じて、お釈迦様が私に「お前はどこに向かって生きようとしているのか？」と質問されているように思えたを書いたが、芸術と宗教は共に、人に生き方を問う。しかも、その問い方が奥深い。慣れ親しんだ日常や習慣を疑うことが必要となる。さらに、芸術と宗教は、商業活動を凌駕したところにその価値を置く。

傘屋卸問屋の四代目として産まれた私は、「商い」の世界こそ興味の中

心であった。大学職員時代は、その商いの世界の発想を大学や芸術、まちづくりの世界に持ち込むことで評価を受けてきたと言える。そんな私が大学教員となり、宗教と芸術とを周旋した結果、それまでの悩みが堰を切ったように溢れだしてきた。

本当にお恥ずかしいことだが、新米教員であった私は、芸大出身でないこともあり、3年間ずっと「自分は芸大生に何を教えるべきなのか」で悩んでいた。実務型教員として、ジェネリッ

クスキルとしてのプロジェクトマネジメント・スキルを身につけさせながら社会と連携したプロジェクトを成功させることが私の役割であったが、自分自身が戴くべき価値をずっと問い続けていたといっている。

社会でコトを成し遂げるためのジェネリックスキルは大切である。就職にだって有利だ。しかし、社会の当たり前を疑う感性が魅力の芸大生に過度な「社会適応」はさせたくない。そのためにも、芸大生が関わるべきプロジェクトはどのようなものであるべきか。学生の将来に好影響を与える世界観や哲学を、プロジェクトを通じて伝えているだろうか。この悩みが、このプロジェクトの推進と共にどんどん膨張していった。

しかしながら、そんな悩みを抱えながらも、このプロジェクトは内外の期待を受けながら着々と進行していく。私の周旋で企画意図を公表すべく記者会見も開いた。とにかく、このプロジェクトは、震災で落ち込んだ日本に勇気と元気を与えるものに仕上がった。

日本の長い歴史の中で不安や問題がないときなどなかった。退蔵院自身が応仁の乱によって、一度焼失した寺院である。今の方丈が建てられた慶長年間には、東寺や伏見城の天守閣が倒壊したマグニチュード7.0の「慶長伏見地震」も起きている。そんな戦乱や災害を乗り越えて京都も日本も、そし

て退蔵院も復活してきた。そして、今、再建後400年の歳月が過ぎ、新たな価値が生まれようとしている。大切なことは、長い時間軸で物事を捉え、次の世代に夢を与えていくことなのかもしれない。

プロジェクトは、夢を託す絵師の公募と選考を残すだけとなった。絵師は、その年の3月に卒業（修了）予定の京都造形芸術大学の学生、大学院生を対象に公募した。退蔵院に匹敵するような古刹ではこれまで、名だたる画家による襖絵の制作や模写による複製はあったが、大学卒業（修了）間もない若者に襖絵64枚もの「大作」を任せる機会は皆無であったであろう。しかも、慶長年間に建てられた重要文化財の方丈の襖絵である。

このような挑戦的な考え方は、松山副住職の意向が大きいことは既に述べた。お寺は人を育てるべきであり、自らが種を撒く存在でありたいとの思いが副住職にはあった。ちなみに、このプロジェクトに際して、寺院側から檀家側へ説明した際の反応は、賛成8割、反対2割であった。この2割の反対について副住職は、この反対意見の存在が、とても大事なことであると言う。なぜなら、誰もが賛成する取組は、既に新規性が無く、やる価値がない可能性が高いからだそうだ。

このような副住職の思いが詰まった挑戦的なプロジェクトの主役とな

る絵師に求められたのは、技術以上に
覚悟であった。参禅することの覚悟、
住み込みに近い生活で制作すること
の覚悟、2年間で64枚の襖絵を描く
覚悟、将来絵師として自立する覚悟。

絵師公募要綱にあるように、これらを
求められた。絵師となれば相当なプレ
ッシャーに耐えなければならない。

<つづく>

妙心寺退蔵院方丈の狩野了慶の襖絵



しゅう せん か にっ き 周 旋 家 日 記 ④ 乾 明 紀

絵師決定ー退蔵院襖絵プロジェクトー

退蔵院襖絵プロジェクトは、400年前に描かれた襖絵を模写するものでもデジタルで複製するものでもない。また、ライトアップなどで見せ方を工夫するものでもない。400年前の退蔵院がそうであったように新しい才能による価値創造を目指したプロジェクトである。

この目的のために我々プロジェクトチームは、京都造形芸術大学の中から公募によりその才能の発掘に取組んだ。公募条件は次の6項目である。

1. 平成23年4月から平成25年10月公開まで、すべての生活を制作に捧げること
2. 京都造形芸術大学の学部もしくは大学院を4月時点で卒業していること
3. 基本的に退蔵院に住み込み、数多くの作品を短期間に制作できること
4. 禅の世界を理解し、ディレクターとの協働に柔軟に取り組めること
5. 墨（モノクローム）による線描を得意とし、題材を選ばずに描けること（※特に水墨画に習熟していることは求められない）
6. 将来絵師として自立する決意を有し、かつ指導教授の推薦状を用意していること

平成23年2月、この条件を満たす大学生、大学院生8名の応募があり、ポートフォリオなどによる書類審査を経て、男性1名、女性2名の3名が面接に挑んだ。面接日は3月23日。春分とはいえ、寒さが堪える方丈で行われた。私も同席したが、終始ダウンジャケットを着たまの面接であった。昼の上とはいえ、禅寺は底冷えするものだとつくづく感じた。面接で合格した学生は、この底冷えする禅寺で日々の作務を行いながら襖絵を描いていくことになる。

さて、面接の時間。学生たちの集合時間は朝8時半。まず、妙心寺法堂に向かい、狩野探幽が8年の歳月をかけて制作した雲竜図を眺めることが最初の関門だ。この大迫力の大作を前に学生たちは何を感じるのか。覚悟かそれとも恐怖か。



その後、控室に入り、学生たちは静寂の中、名前が呼ばれるのを待つことになる。面接の会場は、自らが描いた襖絵が納められることとなる方丈である。ひとりひとり呼ばれ、ご本尊を右手に戴いて着座し、面接官より質問を受ける。

面接官は、松山副住職、国立国際美術館学芸員の中井康之氏、そして現代美術作家の椿昇氏の3名。さすがに禅問答はなかったが、面接官は、応募の理由、学生時代に制作した作品への想い、今後の創作活動への覚悟などを尋ねていく。雲龍に睨まれた後の面接は、学生それぞれの個性を引き出されたように思う。創作への熱い想いを語る者、体調の不安を隠しきれない者。そして、ひとり自然体で飄々としながらも創作への想いを語る女性がいた。その女性は、無限に溢れ出るような線画を描く大学院生だ。ポートフォリオに収められた数々の作品や彼女が描く線画からは、寝ても覚めても創作に打ち込んできたことが伝わってくる。それは圧倒的な創作意欲のエビデンスだ。退蔵院は、剣豪宮本武蔵が修行した場所としても知られているが、私は、この彼女が武蔵のように生涯をかけて道を究めていくのではないかと思った。

面接が終り私の体は芯まで冷え切っていた。私と面接官は控室に戻り、このプロジェクトを誰に託すのかを話し合った。そして、度胸の良さと思いきった線が魅力であることから村林由貴さんを絵師として採用することが面接官の一致した意見となった。私が飄々とした人柄と評した村林由貴さんが、退蔵院のお抱え絵師に決まった瞬間である。

この面接から3カ月ほど後、彼女に会い

に行った。彼女は、訪問直前に体験ではない本気の修行を道場で受け、老師からの「あなたになんて描けない」との言葉に座禅しながら泣いたという。そんな辛い経験もあったようだが、副住職から見た修業後の彼女は、自然を見る目がすどくなり、庭を掃くのがとても上手くなったようだ。

この日、彼女は次のようなことを語ってくれた。彼女は高校時代の部活動（ハンドボール部）で冷静にプレーすることができず、「やりきった」と思えなかったことへの後悔から大学での創作に打ち込んだが、周囲には優秀な学生も多く、満足できない日々が続いた。しかし、友人たちが創作する姿を間近で見て「諦めない」気持ちを感じたという。彼女は、これ以降、努力だけでも負けないようにしようと多くの時間を創作に費やした。そうすることで、ようやく4回生になって創作活動の中で「やりきった」を感じられるようになったそうだ。その後、両親を説得し、入学金の半分を賞金で賄うことを条件に大学院に進学し、このプロジェクトと出会うことになる。絵師に採用された今、何を感じているのかを尋ねたところ、彼女は「目の前にあることを一生懸命やっていくとつながっていく」、そして「自分の人生に根性は馴染まない。感謝の心を持っていたい」と語ってくれたことが印象的だった。

面接の日から1年と8ヶ月ほど経過した先日、退蔵院から、村林さんの活動の中間報告をプロジェクト関係者にお披露目する会のお誘いがあったので、久しぶりに彼女に会いに行った。そこには、袴姿で達磨を描く彼女の姿があった。



400年後も襖絵が残るように筆、墨、和紙、建具、表具などを司る一流の職人たちも一堂に集まっていた。このプロジェクトは、一流の職人の技の伝承にも貢献しているのだ。

彼女は今、妙心寺山内「壽聖院」の書院をアトリエに制作活動をおこなっている。

この日は、アトリエとなった書院の襖に描かれた彼女の作品を見せていただいた。そこには、彼女の気持ちと感性が春夏秋冬となって描かれてあった。四季の中に彼女の心の動きが投影されているようで観ていて面白かった。

現在、村林さんを中心に多くの専門集団が脇を固めこのプロジェクトは推進されている。私がきっかけを作ったプロジェクトによって、ひとりの才能が発掘され、職人の技術の伝承と新しい価値創造に貢献できたことは生涯の誇りである。ある学生が「先生がきっかけを作らなかったら、彼女の今はなかったんですよ」と言ってくれたこ

とを思い出し、この日は、周旋家冥利に浸った。退蔵院の襖絵の創作は、間もなく始まるようである。私にはプロジェクトメンバーとしての役割はないが、きっかけを作った周旋家として、これからの彼女の活躍と作品の完成が楽しみでしかたがない。

<退蔵院襖絵プロジェクト 完>



しゅう せん か にっ き 周 旋 家 日 記 ⑤

乾 明紀

祖母の死と浄土真宗との佛縁

昨年の2月からこのマガジンに執筆を開始し、最初の周旋として、妙心寺の塔頭である退蔵院の襖絵プロジェクトを紹介してきた。私にとって、この襖絵プロジェクトは仏教との再会であった。このプロジェクト以降、不思議なことに様々な佛縁に巡り合うことになったのである。

そのきっかけは、平成23年9月の祖母の他界だった。祖母は大正2年生まれであったので、97歳の大往生であった。祖母は、子が無かった曾祖父母の養女として迎えられた。曾祖父は、洋傘と和傘の卸業を創業していたが、子宝には恵まれず、血縁関係のあった祖母を養女にしたのだろう。その後、祖母は、丁稚奉公からのたたき上げであった祖父との縁談が決まり、家名だけでなく、家業も継いでいった。

祖母は、体が強い人ではなかったが、自分にも他人にも厳しく、他人の厄介になるのが嫌いな人であった。「葬式費用がもったいないから、死んだら傘の箱に入れて捨ててくれ」が口癖でもあった。その祖母も祖父を亡くしてからは、家族に甘えることができる人になった。孫である筆者は、祖母と一緒に四季の花を愛でに京都名所を散策したり、外食を楽しんだり、ときに家族で花合わせをして遊んだ。

その祖母が亡くなった。遺言どおりに傘の箱に入れて捨てるわけにもいかず、両親

と葬儀の準備をすることになった。父親はすでにリタイヤしているため、一応、経済力のある筆者にも発言権が生じた。しかし、喪主の経験が全くない筆者には、葬儀の段取りはまったくわからない。最近、「グリーフケア」と呼ばれる悲嘆回復のサポートが注目されているが、事故死でもなく、また大往生だったせいか、筆者は悲しみよりも、生から死に変化した祖母の体に必要な手続きを考えることが中心であったような気がする。ひょっとすると、手続きをすることで、祖母の死や喪失から逃れていたのかもしれない。

主治医や親戚へ一報を入れ、次に葬儀社の資料を収集した。当たり前であるが、葬儀も内容によってかかる費用がピンキリである。その後、父親が紹介を受けた葬儀社に来てもらい見積もりをしてもらった。ここでようやく葬儀から火葬場への段取りを知った。見積もりをお願いした葬儀社には、枕飾をしてもらい、祖母の体を安置してもらった。これにより、慌ただしかった空気が少し落ち着いた。時計の針は、すでに夜の10時を過ぎていた。そして、ふと思った。はて、お寺への連絡はどうしたものだろう…。そして、両親に聞いてみた。「お寺への連絡はいつするの？」

お正月、お盆、お彼岸にお墓参りは欠かさない家であったが、誰も菩提寺の住職に

会ったことがない。祖父の月命日には、月参り（月忌法要）をしてもらっていたが、それに来られるのは、役僧さんであったため、葬儀に向けたコミュニケーションの取り方がよくわからないのである。両親は「ほんとや、どうしたらいいと思う？」という回答だった。そして、「こんな夜分に連絡は失礼かな？」、「でも、知らせた方がいいんじゃない？」こんな会話を交わした後、勇気を出してお寺に電話した。しかし、電話はつながらなかった。

このときまで筆者らを癒していたのは、葬儀社であった。圧倒的な存在感である。それは情報の非対称性があるからであるが、「死者を送ること」に対する様々な知識を与えてくれるからであり、段取りに関する安心が癒しになった。そこに、宗教家は存在しなかった。我が国において、人が亡くなった直後というものは、恐らくこのようなケースが大半であろう。それが葬式仏教の批判につながっているのは容易に想像ができる。

死者を前にしているにも関わらず宗教家との距離がまったく近くならない時間が 1 時間ほど過ぎたとき、電話のベルがなった。出てみると菩提寺の住職である。会合で外出していたとのことで、息を切らしたかのような声で、恐縮しながらの電話であった。そして、「本来であれば、何を置いてもすぐに駆けつけ、枕経をあげさせていただかなければいけないところを、遅くなって本当に申し訳ない」という住職の言葉が胸に沁みた。筆者には、菩提寺からの折り返しの電話、そして、「何を置いてもすぐに駆けつける」という言葉が、義務的で形式的なセレモニーの準備ではない死者への弔いを感じ

じたからである。祖母は、亡くなったとはいえ、決して社会から忘れられた存在ではなく、丁重に弔われるべき、大切な存在であり、愛しい人であることを改めて気づかせてくれたのである。祖母を誇らしげに感じつつこの日はすでに深夜であったため、枕経は翌朝 10 時にしてもらうことで住職との電話を切った。

そして、住職が死者を弔いにやってくる朝を迎えた。先代の住職とは面識があったが、当代のことは誰も知らない。さらに、先代住職が厳しかったこともあり、少し緊張しつつ身支度をしていたら、予定の時刻より大幅に早く 8 時すぎに住職がやってきた！ 初めて会う住職は、180 センチはあろうかと思う長身の大男だった。さらに驚いたことに長髪で、しかも、その量は多く、縮れ毛であり、後ろで括られてあった。さらに丸眼鏡で、口髭と顎鬚を生やし、まるでベトナム戦争に反対するヒッピーのようであった。実は、葬儀社より「変った人」というのは聞いていたが、僧侶のイメージとは対極とも言える容姿であり、見た目は、まさに「変った人」だった（笑）。容姿から何かにかざりがあるのは明らかだったが、このときは、住職の思想信条はあまりわからなかった。筆者は勝手に既存の権力への反発があるのだろうと想像した。そんな勝手な想像をしつつ挨拶を交わした。長髪に髭面の住職は、笑顔がとっても優しい人であった。

やがて、住職は、おかみそりの儀式（帰敬式）をし、枕経をあげてくださった。おかみそりの儀式とは、剃髪の儀式を簡略化したものと言える。住職の説明によると、実際に髪を剃らないが、頭に剃刀を当てる

ことで剃髪とし、これによって三宝に帰依し、お釈迦様の弟子になったことを表すということだ。そして、弟子になったことを表す名前が、法名「釋（尼）〇〇」であるという。目の前で祖母は、お釈迦様の弟子になったのである。浄土真宗では、戒律を守り、厳しい修行をすることで悟りを開いて仏門に入ることを求めない。だから、戒名ではなく、法名になるのだそうだ。さらに、この儀式は、お釈迦様の弟子になるためのものであるから、生きている間に受けるのが本筋であるという。

この帰敬式と法名に関する考え方は、仏教の中における浄土真宗の個性の表れであるといえる。いわゆる「他力本願」に拠っているからだ。筆者は、住職の説明を聞きながら、人生において初めて、我が家の宗派が浄土真宗であることに自覚的になった。そして、他力本願に至った親鸞聖人の対人援助観に思いを馳せてみた。筆者の仮説はこうだ。

親鸞聖人のいた平安末期から鎌倉初期は、戦乱と天災、さらには、末法思想により、人々の不安は頂点をむかえた時代であった。聖人は、社会に翻弄され、社会的弱者となった人々、大切な人を失った人々に対して、あるいは苦悩する自分自身に対して、自力での悟りを無理強いすることの非対人援助性を見出したのではないだろうか。聖人は、自力で苦悩から逃れようとすればするほど、苦悩が頭から離れない人々の姿、自力で困難から抜け出せないことで自らを責めている人々の姿、あるいは、社会が自力を強要し、援助を受けられず見捨てられた人々の姿を目の前にし、他力という“優しさ”の必要性を感じたのではないかと想像した。

聖人は、苦悩する当事者に、阿弥陀仏の「すべてのひとを必ず救う」という願い（本願）があることを伝え、自力で苦悩に立ち向かうのではなく、他力本願に委ねることこそが大切だと説き、当事者の心理的柔軟性を回復しようとしたのではないかと筆者は考えた。なぜなら、人は、心理的柔軟性が低下するとネガティブ思考に陥りやすいからだ。このような状態では、自ら大切にしたい人生の価値にも気づきにくく、たとえ気づいていても行動できないものである。

また、心理的柔軟性を回復した後に、本人が望んで受ける帰敬式や法名は、お釈迦様の弟子として歩むという「価値」あるいは「コンテキスト」に自らの思考や行動がコミットメントすることへの強力な後押しとなったであろう。人生の指針に基づき行動を選択できる人は、感情をコントロールし、安寧に過ごすことも可能となるのだろう。

このように「他力本願」による心理的柔軟性の回復と三宝に帰依するという価値（お釈迦様の弟子として生きる）に基づく行動選択のススメこそ、筆者が浄土真宗の儀式に出会って感じた親鸞聖人の対人援助観の仮説である。

真宗門徒の家に生まれながらも、祖母が亡くなるまで浄土真宗のことは本当に知らなかった。この仮説も正しいかどうかかわからない。しかし、祖母の死と長髪のユニークな住職と知り合ったことを契機として、浄土真宗のことに少し興味が湧いてきた。後日、そんな筆者に、住職は思いがけない依頼をするのであった。（つづく）

しゅう せん か にっ き 周 旋 家 日 記 ⑥

乾 明紀

“つづき”を書けなかった行動管理の失敗理由

前号のマガジンには、「祖母の死と浄土真宗との佛縁」をテーマに書いた。祖母に死によって菩提寺の住職と出会い、その住職の説明によって浄土真宗に関心を抱いたところ、住職から思いもよらない依頼を受けた、というところで筆を置いた。

今回は、当然ながら、その「つづき」を執筆する予定だった。しかし、月末に体調を崩し、それが書けなかった。筆者は、「つづき」にも書く予定だった菩提寺の50年に一度の大法要をディレクターとしてお手伝いをしたのだが、その当日があいにくの雨となり、準備期間の寝不足とあいまって風邪をこじらせてしまったのである。このため、前号の「つづき」を書く十分な時間が確保できなかった。菩提寺とは1年以上の歳月をかけて準備をしてきたので、その経緯や準備内容などをこの日記に書き留めておきたかったのだが、資料を見返す時間が十分に取れず、執筆予定だった「つづき」は書くことができなかった。

筆者の投稿の「つづき」を楽しみにしておられる方は皆無だと思うのであるが、自分のためにも「つづき」は、是非次号で書きたい。

さて、では何を書くべきか。休載も考えたが、今回の日記では、体調不良から得た教訓(?)を来月の自分のために書き留めておこうと思う。

先ほど、「つづき」を執筆できなかったのは、体調不良としたが、世の中には体調が悪くても原稿を執筆している人はたくさんいる。なので、再発防止に向けて、ここからは、執筆できなかった理由を「体調不良」ではなく、「行動管理の失敗」として捉え考察していくこととしたい。

<行動管理の失敗理由①「プロジェクト化しなかった」>

マガジンの締め切りがある5月に入り、法要の準備が忙しくなってきたが、5月上旬は、法要協力の集大成として、マガジンの原稿を書き、有終の美を飾ることをまだ夢見ていた。しかしながら、法要準備に集中するあまり、原稿執筆に向けた計画（プロジェクト化）を完全に怠ってしまった。この結果、資料がまったく整理されず、執筆プロセスも明確にならないままに月末を迎えた。後述するが、プロジェクト化し、タスクを洗い出すことをしなかったために、

執筆行動を生起させる『先行刺激』を十分に配置することができなかった。

<行動管理の失敗理由②「回避行動」>

月末になると、風邪の症状が悪化し、病院で薬をもらうも症状がなかなか改善されなかった。喉が痛く、咳も出たため、パソコンに向かって頭（の中の言語行動）を使う原稿執筆という行動より、寝たり、頭を使わなくていいテレビを見るなどの行動が多く生じた。つまり、不快からの回避行動ばかりが目立つようになったのである。しかしながら、事前に資料が整っていたら、それが『先行刺激』となって執筆行動が生じたかもしれないので悔やまれる。なぜなら、同時期に締切りがあった学会発表の抄録は、（内容はともかく）整理されていた資料などをまとめることで完成し、提出することができたのである。

<行動管理の失敗理由③『とにかく行動してみる』を実践しなかった>

3 つ目の理由は、資料がなくても、頭が働かなくても「とにかく書き始める」という行動をしなかったことである。最初は、楽しくなくても、書き始めることによって、思わず使いたくなるフレーズが出てきたり、書きたいことが具体的になったり、文字数が増えページが埋まってきたりする。これらの『後続刺激』により、本人も予期していないほどに執筆行動が継続される場合がある。このように「とにかく行動してみる」を実践しなかったことが最大の原因であるかもしれない。書き始めることのハードルが高かったのであれば、「とにかく資料を整理してみる」という行動を実践してみても

良かった。

「とにかく行動してみる」の効果は大きく、その結果によってエンジンがかかりだすと、人は体調不良なんて忘れて没頭するものである。決して好ましい行動ではないが、ネットサーフィンや深夜番組をダラダラ見るのも、何気なく始めた「とにかく行動してみる」の結果であり、これらの行動で意思に反して無駄な時間を過ごした経験のある人は、多いのではないだろうか。

今回は、予定していた原稿を書けなかった行動管理の失敗を振り返り、筆者が思いついた主な理由を 3 つ挙げてみた。ここでの反省を活かせば、休載という事態を招くことはないだろう。そのことを忘れないような先行刺激を考えつつ筆をおくことにする。
<つづく>

しゅう せん か にっ き 周 旋 家 日 記

⑦

乾 明 紀

「住職の依頼をどうしよう？」

今回は、前号で書けなかった前々号の続きを書こうと思う。前々号では、「祖母の死と浄土真宗との佛縁」をテーマに、祖母の死によって菩提寺の住職と出会い、その住職の説明によって浄土真宗に関心を抱いたところ、住職から思いもよらない依頼を受けた、というところで筆を置いた。

98歳の大往生した祖母は、信心深い人だった。その祖母に導かれたのかもしれないが、本当に思いもよらない依頼だった。その依頼とは、親鸞聖人 750 回御遠忌法要のディレクションであった。浄土真宗では、東本願寺だけでなく、末寺においても、50年に一度、宗祖の遺徳を偲び、大きな法要が営まれる。住職にとっては、恐らく一生に一度の非常に大きな行事だ。その一大行事を企画・運営するために、住職は私に、ディレクターとして協力してくれということである。

私は何度もごまかし、はぐらかした。いくら檀家とはいえ、私のような若輩者に勤まるわけかがないと感じたからだ。さらに、住職のこともこれまで知らなかったし、もちろんお寺の歴史も教団のことも知らない。また、総代会的な組織があるのかどうかも知らなかった。しかし、住職は、祖母の仏事がある 7 日ごとに、私に協力を要請する

のである。住職と最初の挨拶を交わした際に、「周旋家」として様々なプロジェクトのプロデュースやディレクションをしていることを伝えてしまっていたので、住職はそこに期待したようだ。

やがて、四十九日が過ぎ、少し落ち着いたもので、私は、受けるか受けないかを正式に回答するために、本格的に住職の話を聞くことにした。2011 年の 11 月だった。これを期に菩提寺のことを深く知ることも悪くない。よく知らないお寺にお参りしたり、されたりしてもありがたくもないし、先祖代々だからといって無批判に信じることに違和感を覚える世代でもある。そこで、まずはヒアリングをさせていただくことにした。

私は、本堂を前に住職にいろいろと尋ねた。特に聞いておきたかったことは、お寺の歴史、どのようなことをされたいのか、どのような特徴があるお寺なのかということであった。

まず、歴史であるが、住職の話によると、私の菩提寺は、宇治川の合戦で梶原景季と先陣争いをしたことで有名な佐々木四郎高綱の弟が、親鸞聖人と出会い、それまで荒廃していた天台宗の塔頭を真宗道場として、嘉禎 2（1236）年に再興したのが始まりで

あるという。現在の住職は、開基から数えて23代目であり、俗名も佐々木氏を名乗られている。また、現在の所在には、5代前の住職のとき、蛤御門の変(どんどん焼け)か鳥羽伏見の戦いのどちらかに巻き込まれ、焼失したことが原因で移転したそう。このような危機があった菩提寺であったが、移転先も京都市内中心部に近く、また、21世住職の人徳もあり、多くの門信徒が帰依したという。

21世住職の人柄については、私も良く聞いた。月参りなどの際に、子どもがお参りしていると、必ずといっていいほど、袈裟の袖からお菓子を出して渡されたそうで、檀家の間では、人柄を表す有名なエピソードとなっている。22世住職は、念仏にも通じる合唱活動に熱心に取り組み、大学生の指導や国体開会式での指揮者なども担当された。そして、私に思い切った依頼をする(笑)当代の23世住職は、様々な経験をされているユニークな方であった。私がとくにそう感じたことのひとつは、住職が仏教に関する探求のために、太平洋を越えて大学院に進学され、そこで家族で暮らしていたことだった。その結果、子どもたちも全員英語を話し(4人中3人はネイティブ!)、一般的な日本人の家族と生活様式が少し異なるのである。私は、これは可能性だと感じた。伝統的なことと対立することもあるだろうが、お寺も変化しないといけない時代に、これはお寺の強みとなると直感した。

そんな可能性のあるファミリーを持つ住職の想いは、この時点では、まだ明確なビジョンにはなっていなかったが、私なりに住職の言葉を紡いでいくと、大法要を機に、

檀家との紐帯を深め、自坊の歩んでいく方向性を定めていきたいのであろうと理解した。様々な分野で活躍されている檀家各位のことも伺った。

また、お話を聞く中で、お寺というものが、対人援助実践のプラットフォームや人々のネットワークのハブとして、様々な可能性があることが見えてきた。仏教では、人間には、「生老病死」という逃れられない4つの苦しみがあるというが、それぞれの苦しみに対して様々なアプローチで支援することが可能であろう。既に、菩提寺でも、社会的対応などが苦手で就労が困難になっている方を支援するNPOに協力されている。これは、「生」あるいは「病」への支援だ。また、お寺の空間は、人が集るように設計されているため、様々なイベントを開催することも可能なのである。

私は、大それたことを考えた訳ではないが、気付けばお寺の可能性を頭に描くようになっていた。そして、仏教(浄土真宗)を学びながら、社会的な貢献ができるのであれば、40歳を過ぎた私の節目としても良い機会であると考えた。私は、丁度そのころ、これまでを振り返り、そして、これからの人生をどのように歩むべきかで大いに悩み、また期するところもあった。亡くなった祖母は、そのような私を浄土から見守り、私のために必要な環境を出現させたのではと思うようになった。私は、住職を通じて、祖母そして阿弥陀仏の本願に救われようとしていたといえる。私は、住職の依頼を承諾し、法要のお手伝いをすることにした。<つづく>

周旋家日記⑧「対人援助学会 第5回年次大会 企画ワークショップ（WS）開催報告」-その1-

1. はじめに

今回は、連載していた菩提寺の周旋報告をお休みし、11月9日に行なわれた対人援助学会第5回年次大会において、筆者が企画したワークショップ「広報・ホームページ推進委員会企画パネルディスカッション『対人援助学会におけるWEBコミュニケーションについて考える』」（以下WS）について報告する（ただし、紙面の関係上、2回に分けて報告する）。

なお、本WSは、筆者が、対人援助学会の広報・ホームページ推進委員会の委員長に任命されたことにより企画したものである。

2. 実施概要

（1）WSの形態と登壇者

本WSは、パネルディスカッション（ミニシンポジウム）の形態で実施し、報告者の氏名・所属・報告タイトルならびに指定討論者は以下のとおりである。

<報告者>

①東山純也（株式会社美文化計画）

「ウェブコミュニケーションの最先端」

②渡辺修宏（水戸総合福祉専門学校）

「学会ホームページへの期待」

③揚佳樹（株式会社アグニット）

「対人援助×デザイン - デザイナーの立場から - 」

<指定討論>

①小幡知史（障害者支援事業所ライフステーション樹林）

②尾西洋平（立命館大学）

（2）開催趣旨

対人援助学会は、「対人援助学」（Science for Human Services）という新しい学範の創造と見直しという学術的な目的だけでなく、「対人援助職についている方々の『連携』や情報交換のプラットフォームを提供」も目的として設立された。複雑化する社会問題に対応するためには、様々な対人援助職者の連携や融合が必要不可欠になっており、そのための基盤づくりは、この学会の重要なミッションと言える。

このような目的を達成するために、年次大会や研究会の開催、対人援助マガジンや学会誌の発刊などをおこなってきたが、本学会が先駆的に行ってきたことは、WEB発刊であろう。WEBにおける情報発信は、「検索」によって多くの人の目に触れることができること、リンクによって様々な関連付けができること、ビジュアル表現の幅が広がること、発刊コストが安価であるなどの利点がある。また、近年はSNS（ソーシャルネットワーキングサービス）が急速に普及し、国内ネットユーザーの52%の4,965万人が利用（株式会社ICT総研,2013）¹しているが、このSNSの利点を含めると、紐帯の強化やつながりの可視化、相互コミュニケーションの速さなどが、WEBの利点としてあげられる。

この企画ワークショップでは、大会5周

¹<http://www.ictr.co.jp/report/20130530000039.html> （2013年11月25日閲覧）

年を契機として、対人援助学会の WEB コミュニケーションを見つめ直し、今後のあり方について検討していく。

（３）第１報告「ウェブコミュニケーションの最先端」（東山氏報告）の概要

①青少年の WEB 使用状況

2013 年 9 月 3 日付『総務省青少年ネットリテラシー実態調査²』によれば、「全体の 99%が、ネット接続のための機器を保有」、「スマートフォン（以下スマホ）の利用率は 59%⇒84%」、「利用時間、2 時間以上が 56%」である。

また、2013 年 10 月 25 日付『IT と人権研究委員会 携帯電話・インターネットに関するアンケート集計中間報告』によれば、「ネットへのアクセス（スマホ）⇒44.9%」、「ネット利用におけるサービスはソーシャルネットワークサービス（以下、SNS）、SNS の主流は LINE⇒74.0%」、「友人・知人の個人サイト（ブログ）を見るか？⇒ほとんど見ない（29.1%）全く見ない（33.4%）」、「ネットでゲームをしますか？⇒しない（42.7%）」、「いつ頃、携帯をもつか？⇒小学校 4 年～6 年（35.3%）、中学校時代（35.2%）」、「携帯電話でよく利用するのは？⇒SNS（72.3%）、ゲーム（33.6%）」、「自分が受信したメール、コメント、メッセージに対して、何分（何時間以内）に返事を送らなければ不安（不満）か？⇒その日のうち（33.3%）」である。

2

http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01kiban08_02000120.html

これらのことから、我が国の青少年のウェブコミュニケーションの傾向は、「携帯を保有する時期は、小学校高学年から」、「スマホ利用の目的は、ゲームではなく、SNS」、「SNS は、メールの代替的な役割」、「SNS の主役は、Facebook、Twitter ではなく、LINE」であることがわかる。

また、スマホの普及により、「金融業や風俗に手を染める若者が急増（背景「地元企業の雇用縮小」、「家庭環境の変化）」、「出会い系サイト（×）⇒SNS（△）」という問題も生じている。

②ネット機器の主役の交代

スマホの存在により、ネット機器の主役は、「PC⇒スマホ」となり、「デジカメ、オーディオは、アイコンに変わった」。また、「LTE（4G）³による高速ユビキタス時代の到来」し、「携帯保有の初期費用はなく、誰でも手が出せるビジネスモデル」（0 円携帯、月額料金の通話料金に分割して上乗せ）であるため、青少年にも普及した。

③インターネットは、SNS という「小島化」現象とコミュニティという名のムラ社会 2.0

「匿名＜実名（Facebook）」、「誰とでも⇒誰かと繋がる（LINE）」、「グループ機能という特定少数との繋がり（「既読」機能）」が傾向であり、ソーシャルネットワークといえないほどの小さいコミュニティ（「小

³現在主流となっている第 3 世代携帯の通信規格（3G）をさらに高速化したもので、LTE の理論上の最高通信速度は、ダウンロードで 100Mbps 以上、アップロードで 50Mbps 以上と言われている（参考：<http://service.ocn.ne.jp/plan/special/lte/>）。

島)」となっている。

「Twitter と Line の使い分け」、「不特定多数と特定少数」、「『既読』『いいね』は誰からか興味を持って欲しい。」これが、SNS (LINE) 疲れや Twitter の画像投稿事件に繋がっていると考えられる。

このように、SNS では、コミュニティが沈殿化し、「『中学 2 年生』から止まった状態」や「似たもの同士との繋がりを求める傾向」も見られ、「同じ世代、同じ趣味、同じ学校、同じ地元、同じ境遇（環境）」によるコミュニティという名の小さな「ムラ社会」を構成している。

④メディアリテラシーの重要性

ネットや SNS 利用時のトラブルから回避するためにも次の視点でサービスを理解することが大切である。「サービス提供者の意図を見抜く」、「コンプガチャ⁴ (グリー)、ビジネスモデルの理解」、「『無料』はない(お金を提供するか、情報を提供するか)」、「広告モデルから、お金の流れを理解する」。

また、「ネット世界でも現実社会と同じ規範が求められる」、「匿名<実名 (Google ハミングバード)⁵」、「相手の SNS で自分はどうのように映っているのかを理解する」、「スマホを使わない統一ルール (共有ルール) を決める→返信の加速化 (SNS 疲れ) を制限できる」、「歩きながらの禁止、時間

帯の制限、土日祝日は一旦、中止など」など行動の見直しも大切である。

⑤オンライン学習の潮流

アメリカの高等教育では、ハーバード大学やマサチューセッツ工科大学 (以下 MIT) が、「無料オンライン授業の拡大」をおこなっており、ハーバード大学と MIT が協働で設立した連携した「edX⁶ と Google とが連携 (2013 年 9 月 10 日発表)」し、さらなる拡大を目指している。

このような動きは、大学が、「Education (教育課程に基づく学び)」だけでなく、生涯学習時代の「Learning (学びたいものを学ぶ)」を意識したものといえる。これらの動きがさらに拡大すると、日本では、「6334 教育の再定義」が必要になるであろうし、「開発途上国の子供たちの学ぶ機会の拡大」に期待がもてる。

一方、この「無料オンライン授業の拡大」は、「優秀な人材をグローバルで獲得合戦」であり、さらに、「Google と edX 連携の意味」は、「教育の主役が学校⇒企業」への動きである可能性もあることは見逃せない。

なお、「オンライン教育の弊害」としては、「対面授業より習熟効果が低い」、「飽きやすい」、「断片的な知識」、「情報のつまみ食い」、「時流に踊った知識>知恵」などがあるとされている。

⁴ コンプリートガチャの略。SNS 上のゲーム (ソーシャルゲーム) におけるアイテムを販売 (課金) する仕組み。この課金の仕組みは、消費者庁が景品表示法違反であるとした。

⁵ Google の新しい検索アルゴリズム。講演では、信頼性によって検索結果が変わることが紹介された。

⁶ ハーバード大学と MIT が共同で設立した「無料オンライン授業」のプラットフォームを提供するコンソーシアム。
<http://service.ocn.ne.jp/plan/special/ite/>

⑥対人援助学会の WEB 戦略についての提案

以上のような現状を踏まえ 5 つの提案をおこなう。①スマホやタブレットでの閲覧が増加しているので、「Responsive Design」によって、表示された機器や画面に最適化するようにページを制作する。②「価値のある情報」を「Blog」で提供する。③「1分以内の動画コンテンツ」を提供し、活動を映像で伝える。④「コンテンツルール（Creative Commons⁷）の明確化」をおこない著作物の利用条件を明らかにする。⑤「サイトと SNS との連携」をおこない、近年利用者を増やしている「Google+」⁸と連携するのもよいだろう。

（４）第２報告「学会ホームページへの期待」（渡辺氏報告）の概要

渡辺氏からは、一学会員の立場から、学会ホームページへの期待が語られた。

①学会ホームページに求める機能

学会員がホームページ（以下 HP）をどのように活用するかを想定した場合に、以下の 6 つの理由が考えられる。

- ①援助について知りたい、勉強したい
- ②援助者や被援助者などにむけて発信したい
- ③援助者を探したい。
- ④援助者や関係者と交流したい

⁷ Creative Commons（CC）は、著作物の利用条件をわかりやすく意思表示するためのプロジェクト。

参考：http://creativecommons.jp/

⁸ Google が提供する SNS。

⑤備忘録

⑥その他

これらの「情報交換」・「連携」・「融合」のニーズに対して、学会 HP を確認すると、一部準備中はあるものの情報を得ることができるようなコンテンツ（リンク先の情報や大会などの事業含む）が準備されている。

今後、HP の見直しを行う場合は、「情報交換」・「連携」・「融合」に必要な情報を「スピーディ」・「ローコスト」・「ユビキタス」の 3 点を同時に実現しながら提供する必要があるだろう。

②デザイン・ブログ・Facebook

対人援助関連団体の HP もデザイン性が優れているものがある。例えば、!-style（エクスクラメーション・スタイル）⁹、NPO 法人スウィング¹⁰、NPO 法人クリエイトサポートレッツ¹¹などは、デザインを重視した HP となっている。

また、HP にブログを開設する場合に参考になると思われるのが、アクセス数の多い「日本科学未来館」の「科学コミュニケーターブログ」¹²である。

学会の Facebook 利用について調べたところ、日本マーケティング学会、日本情報

⁹ <http://www.ex-style.jp/index.html>

¹⁰ <http://www.swing-npo.com/>

¹¹ <http://cslets.net/>

¹² 日本科学未来館は、最新の科学技術の紹介や社会一般へ科学技術者の研究成果等を発信することなどを目的に運営されている。約 50 名の科学コミュニケーターが更新するブログは、開設後約 2 年で 100 万ページビューを超えた。

<http://blog.miraikan.jst.go.jp/other/20>

社会学会、日本マテリアルライフ学会、日本菌学会、日本患者学会、日本水産工学会などがすでに利用しており、日本FACEBOOK学会なるものも存在した。

Facebook には、「HP より高いアクセスビリティ」、「ML やマガジンとしての機能」、「掲示板としての機能」、「備忘録としての機能（画像、動画、ドキュメント）」を有しており、また、「複数指定管理者の仕組み」があることや「(基本的に) 実名であることの『信頼性』と『レスポンスの良さ』」も利点としてあげられ、当学会としても利用を検討してはどうだろうか。

③SNS 利用上の課題

しかしながら、SNS を利用する場合に「情報管理のリスク・個人情報の漏えい防止」に留意する必要があると思われる。「エンドユーザーにまかせていいのか?」、「誰がどこまでやれる? やるべき?」なのかについては、事前に取り決めをする必要があろう。

また、「運用ルールとデジタルディバイトの問題」がある。「知っている人は大丈夫」であるが、「知らない人は知らないうちに不利益を被る」ことになり兼ねない。このことについても配慮する必要がある。

これらのリスクについては、他学会の SNS ポリシーなども参考にしながら検討していく必要があろう。(つづく)

周旋家日記⑧「対人援助学会 第5回年次大会 企画ワークショップ（WS）開催報告」-その2-

（5）第3報告「対人援助×デザイン - デザイナーの立場から -」（揚佳樹氏）の概要

①ウェブデザインとは

ウェブデザインとは、情報をデザインすることである。視覚だけでなく「情報を整理」、「情報を再構築」、「情報をレイアウトする」という工程がウェブデザインである。

ウェブデザイン = 情報をデザインする

視覚的要素だけではなく、以下の工程がウェブデザインです。



②情報を整理する

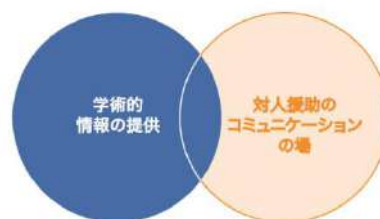
対人援助学会のウェブサイト「ウェブデザイン」していくために、まずウェブサイト開設の目的を整理してみる。

対人援助学会の設立趣旨からウェブサイト開設の目的を考えると「対人援助職、対人援助に興味を持つ方々のコミュニケーションの場」と「対人援助の学術的な場」が想定される。つまりは、それらに興味関心がある人々に「対人援助に関する情報の提供とコミュニケーションの場」を創ることが、ウェブサイト開設の目的となる。

現状のウェブサイトを見ていると学術的な情報は充実していると言えるが、コミュ

ニケーションの場は提供されていない。

現状のウェブサイト



学術的情報は充実しているが、
コミュニケーションの場が提供されていない

③情報を再構築（目的からニーズを再構築）

「対人援助職、対人援助に興味を持つ方々のコミュニケーションの場」と「対人援助の学術的な場」では、利用者のニーズが異なる。

④情報をレイアウトする（レイアウトの再考）

訪問者には大きく2つのニーズがあるのであれば、次のようにデザインを変えてみることが出来る。

ニーズの違いを視覚的に分類する方法として

タブでの表示の切替方法



④コミュニティの立ち上げ

ホームページだけでなく Facebook などを活用してコミュニティを形成していくことで双方向のコミュニケーションも充実す

ることができる。

ただし、インターネットのコミュニティは、誰もが発言したいわけではない。20%の「発言したい人」と80%の「発言を参考にしたい人」が存在すると言われている。

インターネットでのコミュニティーには大きく2つの訪問者がいます。



発言したい人と発言を参考にしたい人のニーズを満たすことができれば、ウェブ上のコミュニティが出来上がる。

⑤導入コミュニティの一例 (Facebook コミュニティ)

Facebook コミュニティには、主に「実名登録のため信頼性が高い」、「個人での繋がりが強い」、「メールアドレスを交換しなくても交流できる」などのメリットがある。

一方、「プライバシーを守りにくい」、「アカウントを持っていないと閲覧できない」、「コミュニティを見つけにくい」のデメリットが挙げられる。



参考：Facebook のページ

⑥導入コミュニティの一例 (Google+ コミュニティ)

Google+ コミュニティには、主に「アカウントがなくても閲覧できる」、「実名を勧めているがイニシャルでも OK」、「コミュニティサービスが充実している」などのメリットがある。

一方「プライバシーを守りにくい」、「発言などするにはアカウントが必要」というデメリットが挙げられる。



参考：Google+ のページ

⑦導入コミュニティの一例 (FAQ コミュニティ)

OKWave¹などの質問や疑問に答えるウェブサイトは FAQ コミュニティと呼ばれている。この FAQ コミュニティの主なメリットとしては、「プライバシーを守り発言ができる」、「アカウントがなくても閲覧できる」、「FAQ を蓄積でき、検索からの訪問を見込める」などがある。

一方、メリットとして「システムの構築が必要 (コストが必要)」、「匿名での質問が

¹<http://okwave.jp/>
株式会社オウケイウェイヴが運営している FAQ (Frequently Asked Questions) コミュニティ。「OK」とは、Q&A の流れを表す「Oshiete? Kotaeru!」の略。

基本なため質が安定しない」、「質問への回答が必要」などが挙げられる。



参考：OKWave のページ

⑧視覚について

ウェブサイトの閲覧環境は、パソコンだけでなく iPhone などのスマートフォンや iPad などのタブレット端末が増加している。



このような閲覧環境の変化に対応するために「レスポンシブデザイン」という手法

閲覧環境に合わせて変化するデザイン = レスポンシブデザイン



が用いられるようになっている。

これは、機種や画面サイズに応じてレイアウトが最適に変化するようなファイルを作成しておくことで、訪問者がストレスなくウェブサイトを閲覧できる手法である。この手法では、これまでのように画面サイズが異なる機器に合わせて複数のレイアウト（ファイル）をあらかじめ用意しておく必要もない。

⑨運用が大切

情報を整理し、見やすいレイアウトでデザインされたウェブサイトも公開後に改善していくことが重要である。ウェブサイトは、公開後もログを解析し、分析することで仮説を立てメンテナンスをしていく必要がある。

ウェブサイトは公開してからが重要

以下の工程を常に繰り返し、外的要因などに対応させていきます



（６）指定討論者からのコメントの概要（指定討論者：小幡知史氏・尾西洋平氏）

①小幡氏からのコメント

対人援助職としては、現場で困っていることも多く、勉強したいという思いがある。知りたい人が専門家に尋ねるものがあったてもいいと思う。また、情報が整理されたデータベースがあるものがないのではないだろうか。例えば、徳島 ABA 研究会²の事例研究支援データベースなどは大いに参考になるのではないだろうか。

²<http://tokushimaaba-renraku.blogspot.jp/>

②尾西氏からのコメント

普段は顔を合わすことができない対人援助職者たちがウェブ上で「対人援助学」について意見交換を行うことができないであろうか。また、それを通して「対人援助学」という概念を構成できていけないだろうか。

③ディスカッション

ウェブ上での意見交換は閲覧者の参考となる一方で、誤った情報を拡散してしまう場合や発言によるトラブルも生じる場合がある。コミュニケーションが活発化した場合の弊害にも対策を講じることが必要であろう。そのような対策を講じつつ「対人援助学」の概念が構成できていくような仕組みがウェブ上にできれば望ましい。

(7) 最後に

筆者が、対人援助学会の広報・ホームページ推進委員会の委員長に任命されたことにより対人援助学会のウェブコミュニケーションを見直す機会として、このような企画ワークショップ（「広報・ホームページ推進委員会企画パネルディスカッション『対人援助学会におけるWEBコミュニケーションについて考える』」）を開催した。

対人援助に関わる人々の「連携と融合」を目指す本学会であるが、ウェブ上においては、その目的を十分果たしているとはいえない状況であることが本ワークショップから見えてきた。しかしながら、報告者や指定討論者の提言から今後のウェブコミュニケーションの方向性も見えてきた。

3名の報告者が指摘するように、ホームページとSNSやブログなどを連携させ、価値のある情報の提供と双方向のコミュニティ

を形成していく仕組みが必要であろう。さらにデザインも重視し、閲覧者のニーズに対応しやすいデザイン（タブの切り替えなど）と様々な機器にも対応できるレスポンシブデザインを採用していく必要がある。また、揚氏からはウェブサイトは公開後の検証作業（PDCAサイクル）の重要性が指摘されたが、ログ解析による絶え間ない見直しはもちろんのこと、東山氏や渡辺氏が指摘したように著作物の運用ルール明確化や投稿によるトラブルを未然に防ぐルールづくり（行動形成のためのデザイン含む）も大切である。この点は小幡氏や尾西氏を交えたディスカッションの際にも大いに話題となった。コミュニケーションが活性化した場合には、情報の交換が活発になる一方で「炎上」のような問題も生じるからである。

ウェブコミュニケーションには、このような問題が生じる恐れもあるが、時間や空間の制約を受けずにコミュニケーションできるという特長をウェブは持っている。渡辺氏が指摘するように、対人援助に関係する人々が「情報交換」・「連携」・「融合」するための必要な情報を「スピーディ」・「ローコスト」・「ユビキタス」に提供するためにウェブサイトは必要とされている。このワークショップで語り合った内容を参考に学会が目指す「連携と融合」、そして「援護活動（アドボカシー）」や「対人援助学」の概念構築も視野に入れたウェブサイトの構築を目指していきたいものである。

周旋家日記⑩「PBL シンポジウム発表報告『PBL ベースド大学改革』－その1－」

乾明紀

今回は、平成26年5月17日におこなわれた日本PBL協会主催のPBLシンポジウムの発表内容の前半部分について報告します。実は、平成26年5月16日の23時25分に長男が生まれたため、シンポジウムの会場には行くことができず、なんと産婦人科の病室からの発表となりました。

1. はじめに

佛教大学の職員から大学の連合体である大学コンソーシアム京都への出向などを経て、京都造形芸術大学の教員となった私は、2013年4月より京都光華女子大学のキャリアセンターの教員となり、キャリア形成学部の改組に伴うPBL（Project Based Learning）の導入に関与した。PBLとは、プロジェクトという計画と実行を伴う実践的な取り組みをおこないながら、科目の習得目標である知識や態度を学習する方法論のことである。大学職員時代からこのような実践的な教育方法の必要性を感じ、いくつかの活動を経て、現在PBL科目を担当している。今回の報告では、大学職員時代に携わったPBLに類似する活動と教員として携わったPBLによるカリキュラム改革の取組について報告する。

2. 佛教大学の職員時代に考え実践したこと

佛教大学の職員であった2000年ごろ、学生課で課外活動支援を担当していた私は、学生からの相談に対応する中で、学生リーダーが組織運営上の様々な課題に悩みなが

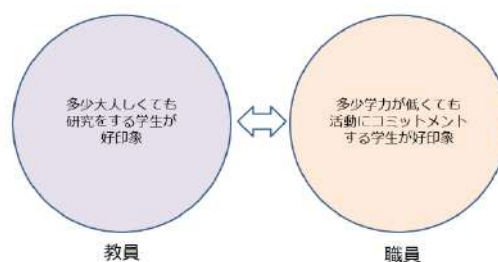
らクラブやサークルを運営していることがわかった。全国大会を目指す体育会クラブから学園祭での発表を主な活動とする文化系のサークルまで様々な団体のリーダーが組織運営上の課題を抱えながらも熱心に課外活動をおこなっていた。一方、大学側は、正課活動と課外活動は大学教育の両輪と言いながらも教育的な支援はほとんどしてこなかった。

学生が大学に来る目的は (大学職員ジャーナル, 2003)



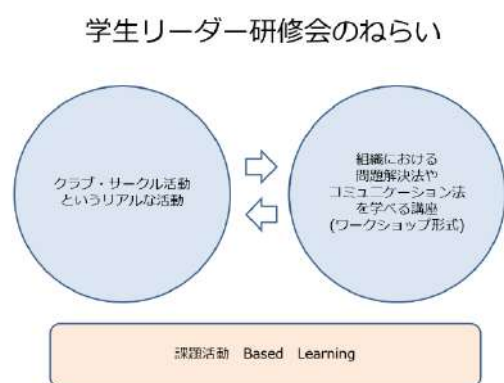
多くの大学で課外活動の教育効果は認められていたが、「研究による教育」というモデルがあり、当時は、正課教育外に構造化された教育の機会はほとんどなかった。インターシップなどもなかった時代である。社会人として7.8年目になろうとした私は、組織における学びの意義を感じており、職員として、課外活動を基盤とした教育活動も必要だと強く思ったのである。

教員と職員の目線の違い



そこで、学生部長を説得し、『学生リーダー研修会』¹（乾，2003）というものを企画提案した。これは、課外活動団体に所属する学生を対象に、企業がおこなっている管理職研修や新人研修を学生用にアレンジしたもので、企業研修を担当する講師を招いておこなった。

なお、このときの講師の姿を見て、「自分もいつかこのように学生を勇気づけたい」と思ったことが今のキャリア形成に大きく影響している。



3. 大学コンソーシアム京都時代に携わったこと

大学コンソーシアム京都時代には、初代学生交流事業部の総括主幹となり「京都学生祭典」の第2回以降の推進を担当した。この祭典は、学生の力で京都を活気づけようと、京都経済同友会が音頭をとり、大学コンソーシアム京都が賛同することで始まったものである。私が担当する前年（2003年）におこなわれた第1回目は、立命館大学に人気歌手である倉木麻衣さんが在籍し

ていることもあり、彼女のスペシャルコンサートを目玉に10万人以上の来場者を平安神宮内外に集め、大いに盛り上がった。この成功を受け2回以降の推進（学生支援）を私が担当したのである。当時の事務局長から10万人以上の来場者と運営資金1億円の獲得を目指すように指示されたが、私が引き継いだ時点における学生実行委員の人数はなんと7名であった。この人数の少なさに愕然とし、さらには、学生はタレントに頼らない祭を指向したため、前途多難な船出であった。7名の学生を鼓舞し、ゴールデンウィークまでに100名の学生を募り、さらに学生を増やしつつ目標の運営資金の獲得も達成し当日を迎えた。

残念ながら、第2回京都学生祭典は、台風24号の上陸に伴う警報発令により屋内企画の全てが中止となる悲運に襲われたが、起死回生を目指した第3回京都学生祭典は、創作した「京炎そでふれ！」踊りの成功などもあり、述べ12万8千人の来場者を集めた。挨拶に訪れた京都市長（当時）は、それまでの非協力的であった見解を180度転換し、「京都の三大祭である時代祭、葵祭、祇園祭に次ぐ4大目の祭にしていこう」と挨拶し、京都府知事はじめ多くの関係者がこの成功を喜んだ。この年の成功により、本祭典は大きく発展し、途切れることなく継続し、今年で12回目を迎える。



（画像は、京都学生祭典 WEB サイトより）²

この京都学生祭典の成功により、学生の

¹ 乾明紀,受身でなく、コンサルタントとして～学生の「学びと成長」のために大学職員は何ができるか,大学職員ジャーナル第6号, 高等教育研究会, pp45-46, 2003年3月

² <http://www.kyoto-gakuseisaiten.com/>

可能性や学生とプロジェクトを実践する際に大切なことが可視化された。主なものとしては、①学生は、実践的な学びを欲している、②学生は、組織や社会に貢献したいと思っている、③学生には、新しい価値を生み出すパワーがある、④学生の力に期待している地域や組織は多い、⑤学生にプロジェクト・マネジメントを修得させることができれば、大きな事業でも可能である、⑥大切なことは学生を主役にさせること、などであり、私にとっても大きな学びとなった。

4. 京都光華女子大学へ

John W. Thomas (2000)³は、PBLに関するレビュー論文の中で、PBLには①中心性 (centrality)、②掻き立てる課題 (driving question)、③建設的な調査 (constructive investigation)、④自律性 (autonomy)、⑤現実性 (realism)、という5つの基準が含まれていると述べているが、この定義からすると、学生リーダー研修会も京都学生祭典も課外活動であり、「中心性」の基準に該当しないものであった。大学における教職員の壁は厚く、教育課程に直接的に関することはなかった。

- PBLの5つの基準**
John W. Thomas (2000)
- ① 中心性 (centrality)
 - ② 掻き立てる課題 (driving question)
 - ③ 建設的な調査 (constructive investigation)
 - ④ 自律性 (autonomy)
 - ⑤ 現実性 (realism)

その後京都造形芸術大学のプロジェクトセンターに所属する教員となり、芸術系分野において、中心性の基準を満たすプロジェクトをいくつか実施したが、私自身が学科に所属することはなく、傍流としての関わりであったとも言える。その後、立命館大学に籍を移し、「プロジェクトベースの学習者中心マネジメント方法の研究」をおこなっていた 2013 年に京都光華女子大学とご縁を持つこととなった。同校の教員募集は、同校のキャリア形成学科のカリキュラム改革に伴うものであった。

京都光華女子大学では、「現代的教育ニーズ取組支援プログラム (現代 GP)」⁴の採択に伴い人間関係学科を改組し、2010 年度にキャリア形成学科を設置した。総合的社会人基礎力の養成を主たる教育目標としてスタートしたが、2014 年度に全学的な学科改組により社会福祉分野が健康科学部の学科として独立することが決まり、キャリア形成学科は新しいカリキュラムで生まれ変わることとなった。

学部学科改組 (カリキュラム改編)



新生キャリア形成学科では、女性の社会

³ Thomas, J.W. (2000). A review of research on project-based learning. San Rafael, CA: Autodesk.
www.bobpearlman.org/BestPractices/PBL_Research.pdf

⁴社会的要請の強い政策課題に対応した取組の中から、特に優れた教育プロジェクト (取組) を選定し、財政支援を行う文部科学省の高等教育支援事業

進出が求められる時代に対応し、「組織や個人をマネジメントできる人材の養成」を教育目標と定め、さらには、能動的な学習者を育成すべくプロジェクト科目を必修科目としたカリキュラム構築を目指した。私は、この学科改組に伴う新しいカリキュラムづくりを支援すべく、**2013** 年度にこの大学に異動したのである。(つづく)

周旋家日記⑪「PBL シンポジウム発表報告『PBL ベースド大学改革』—その2—」

乾明紀

4. プロジェクト科目導入前夜

2014 年度の全学的な学部改組に伴いキャリア形成学科の教育内容も大胆に変更されようとしていた。マネジメント力の習得を教育目標の柱に掲げ、改組の目玉としてプロジェクト科目の必修化が計画されていたのである。既に多くの大学でプロジェクト型科目が導入されているが、キャリア形成学科では 3 年間の必修科目として実施されようとしていた。私の知る限り文社系において、3 年間の必修化は珍しく、女子大学に至っては類を見ない試みであろう。「デザートではなく、メインディッシュとしての PBL」¹が提供されようとしていたのである。



2013 年度までの学科紹介サイト

¹ 日本 PBL 協会の清水計雄代表理事によると、日本で行われている PBL の多くは、カリキュラムの中心に置かれていないものが多く、その状況をこのような表現で筆者に説明された。

キャリア形成学科がこのような大胆なカリキュラム改変に挑んだ理由は次の 5 つであった。①プロジェクト推進は、マネジメント力を習得する効果的な方法論である。②多様な授業で学んだ知識をプロジェクト推進で活用することで、その定着を促すことができる。③プロジェクト推進で認識した必要な学びを他科目で深化することができる。④依頼先やステークホルダーへのアウトプットを通じて、社会貢献への意欲向上が見込める。⑤キャリア形成意欲、自己肯定感の向上が見込める。

このように多様な学生をプロジェクトにより駆動 (drive) させ、学科の教育目標 (centrality) であるマネジメントの知識とスキルの習得を目指そうとしたのである。

しかしながら、学科にはプロジェクト推進に向けた課題がいくつか存在した。まず、プロジェクト科目を実施するために必要な実践と理論を専門とする教員が 1 名しか在籍していなかったことである。必修化するためには指導体制の充実と組織的な指導法の確立が急務であった。また、4 年間必修であるゼミとの相補性、連動性も未確定であった。いずれも、学科カリキュラムの中心 (centrality) で PBL が実施されるが故の課題であった。

このような事情によりカリキュラム・マネジメントと PBL 推進に実績のある教員の採用が計画されたのである。

5. 採用と PBL 実施に向けた環境づくり

2012 年の 6 月ごろ、教員採用等についての相談があった。当時、立命館大学の研究員として働きつつ、浄土真宗大谷派の寺院の大きなプロジェクトを推進していたが、

職員時代からやってみたいと思っていたことができる可能性があることと、浄土真宗大谷派系列の大学からお声をかけていただいたことに不思議なご縁を感じ、2013年4月より奉職することにした。

さて、奉職後はPBLと新カリキュラムの実施に向けて様々な手を打つ必要があった。まず、内部教職員の動機づけのためのPBL研究会の開催である。研究会では、外部のPBL研究者、高校教員、企業のプロジェクトマネジャーなどをスピーカーに招き、PBLの魅力や可能性を大いに語ってもらった。また、スピーカーの期待を受けるかたちで、大学が目指すPBL教育の意図を説明（宣言）することもおこなった。このような外部との交流を通じて、PBL推進は社会的な要請に応えるものであることを内外に示そうとしたのである。さらに、講演形式の研究会だけでなく、ワークショップ形式による研究会を月1度程度開催し、プロジェクトを通じたマネジメント教育の具体的な方法論についても理解が深まるように工夫した。これらを通じて教職員にPBLへの動機づけを図ったのである。

同時に、カリキュラムの中のPBLの位置づけについての再確認もおこなった。プロジェクトが、マネジメント教育の核であり特色の一つであること、効果的なプロジェクト学習を実施するために最低でも2コマ連続で実施する必要があること、リフレクションを十分におこなうことが大切であることを訴えた。さらに、ゼミや他科目との相補性や連動性を高めるために、プロジェクト科目を担当する教員が、カリキュラム検討のワーキンググループに加わったり、1年生対象の基礎ゼミ教員を担当するなどの

体制づくりをおこなった。



2014年度の学科カリキュラム

このようにカリキュラム・マネジメントとしての開講形態の調整や体制づくりをおこなう一方、プロジェクト科目担当教員が連携できる体制づくりにも着手した。具体的には、研究会のワークショップなどにて教員間のコミュニケーションを増やしながらか、科目開講時に担当教員が過度な負担を強いられることのないよう、チームティーチングとして教育プログラムを開発・推進する体制を整えた。

最後に、PBL実行のためには、学生が駆動（drive）するリアルな課題を配置する必要がある。担当教員が相談の上、「大学のための学園祭の活性化」をプロジェクトテーマと定めた。

ここに掲載しているのは、高校生や保護者に郵送される2014年度の学科紹介チラシである。前年までの学科紹介サイトに比べプロジェクト活動が全面に出るようになった。広報活動においても、PBLによりマネジメント力の習得と向上がねらいであることを内外に示したのである。



2014 年度学科紹介チラシ

6. 学園祭活性化プロジェクトのねらい

ここで、PBLのテーマを学園祭の活性化としたねらいについても紹介しておこう。まず、学園祭という1回生の学生にとって身近なテーマを設定することで、学生がプロジェクト（マネジメント）の主体者であることを感じられるようにした。さらに、学園祭の活性化というミッションを大学（学生サポートセンター）から学生に提示するで、学生は自分たちの手で地域貢献や大学の魅力増進にコミットしていくことになり、その結果として、学園祭を通して学生の活気が外部に発信されていく。このように我々の創り出す環境によって、学生は能動的に駆動し、学生のマネジメントによって大学の魅力と誇りが創られていくことをねらったのである。

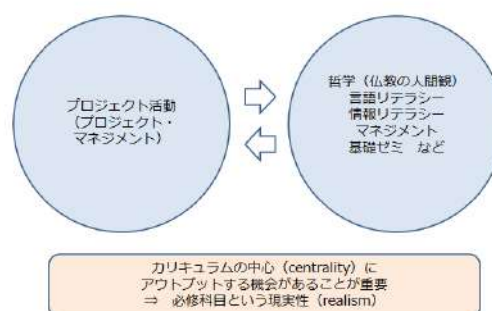
また、1回生を対象にした必修のプロジェクト科目であることから初年次教育としてのねらいに基づく関係性づくりもおこなった。まず、授業において構造化されたコミュニケーションワークを導入し、学科内で学生が相互依存する学生コミュニティが形成されることを目指したのである。さらに、大学をステークホルダーと説明することで、いわゆる「お客様状態」にならない

ようにし、プロジェクトについてのミッションと制約条件の提示、それらに応じたサービスの提供と発信により、自分たちの振る舞いが社会化されていくように工夫した。このような環境設定を通じて、教員と学生との関係は、対立や甘えの関係ではなく、「協同体」に変化していく。そして、教員と学生が共に大学文化を創っていくことができるのである。

7. プロジェクトは提供側の総合力が問われる取組み

PBLは、学習者である学生だけでなく、その学びを提供する組織や教員の総合力が問われる取組みである。カリキュラムの中心にプロジェクトというアウトプットの機会を置くからには、各科目の学びを有機的に関連づける必要があり、そのためには教員のマネジメント力やコミュニケーション力が必要不可欠となる。キャリア形成学科1回生の必修科目である基礎ゼミとプロジェクト科目の連携・連動を例に挙げれば、双方の科目を担当する教員が、週に1回程度のミーティングを開催し、学生情報を交換しながら、それぞれの科目において柔軟に教育内容や学生対応を変化するようにしている。

総合力が求められるプロジェクト



18 歳人口の減少と大学進学率の高まりの中で、教員には研究力以外の力も求められる時代となった。PBL を実践したい大学はますます増えていくだろう。しかし、教員にその能力がないと効果ある PBL の実践は難しい。筆者はこれまでの経験に基づき次の 3 つの力が必要であると考えている。

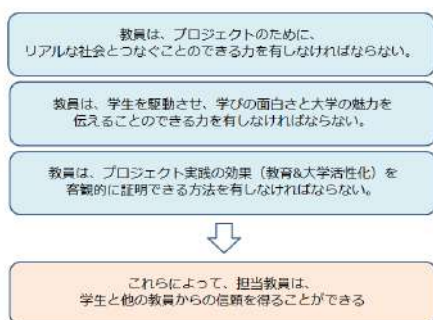
①教員は、プロジェクトのために、リアルな社会とつなぐことのできる力を有しなければならない。

②教員は、学生を駆動させ、学びの面白さと大学の魅力を伝えることのできる力を有しなければならない。

③教員は、プロジェクト実践の効果（教育&大学活性化）を客観的に証明できる方法を有しなければならない。

この 3 つの力を発揮することで学習効果の高い PBL が実行され、担当教員は、学生や他の教員、そして社会から信頼される存在になるのではないかと考える。

PBLのFD的側面



7. おわりに

以上が、平成 26 年 5 月 17 日におこなわれた第 2 回日本 PBL シンポジウム（日本 PBL 協会主催）²の講演報告である。多様な

学生に教育活動を通じて支援していくことやプロジェクトを通じて地域や人々の問題を解決していくことも“対人援助”であると捉え、このマガジンに執筆させていただいた。プロジェクト科目で学んでいる学生は、以下の日程でその成果は発揮する予定である。社会的な評価を受けることが実践的な学びの魅力であり、学生を駆動させる大きな原動力である。ぜひ、学生の学びの成果を見に来ていただきたい。

光華女子学園あかね祭

11 月 15 日(土)・16 日(日) 10:30-17:00

※開催時間は多少変更の可能性があります

キャリア形成学科の学生は、現在、お化け屋敷・ゾンビカフェ・モザイクアート・アクセサリー販売・シークレットイベントの準備と広報活動などをおこないながら学園祭の活性化に取り組んでいます。下記 URL のキャリア形成学科学生情報ポータルサイトでも学生の準備情報をお伝えしていきますのでご覧ください。

<http://www.koka-career.jp/>

²他の講演や当日の様子は次の URL にアクセスしてご確認ください。

<http://www.pmai.or.jp/article/15067077.html>

周旋家日記 12「キャリア形成について考える① 一問われる大学のあり方」

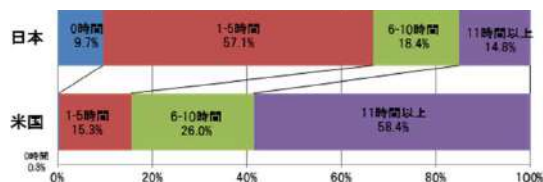
乾明紀

1. 勉強しない大学生？

仕事柄、「勉強」あるいは「学習（学修）」について考えることが多い。大学にいると「最近の学生は勉強しなくなった」という言葉をしばしば耳にするが、学生を見ると「確かに！」と感じる一方、自らの学生時代を振り返って学生を見ると「大学って勉強以外にもすることあるよね」と同情するときもある。しかし、新書を読解できない大学生に出会うと学力の底上げの必要性を強く感じる。

手元に文部科学省作成の「大学入学者選抜、大学教育の現状」という資料¹がある。これは、安倍首相が設置した教育再生実行会議の資料として作成されたものだが、この資料には、日米の大学1年生の学修時間（1週間当たり）の比較が掲載されている（図1）。

図1：日米の大学1年生の学修時間（1週間当たり）比較



このグラフは、2007年に東京大学・大学経営政策研究センター（CRUMP）がおこなった『全国大学生調査』²を元に作成されたものであるが、日本の大学生の学修時間の少なさがわかる。

¹www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaiei/dai11/sankou2.pdf

²<http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/cat77/cat82/>

日本の大学は、入学するのは難しいが、入学さえすればレジャーランドであると評された時代があったが、この20年間で、高校と大学の接続の状況は大きく変わった。その最大の原因は18歳人口の減少であるが、筆者がまだ大学生だった頃（大学職員になる直前）の大学進学に関する状況と大学教員になった頃では、表1のとおり大きく異なる³。

表1：18歳人口・入学者数等比較

年	18歳人口	高校卒業者	大学志望者	入学定員
1992	205	180	92	47
2013	123	106	68	58

（単位は万人、千人以下四捨五入）

筆者が高校生だった頃に比べ、大学に入るための競争は確実に緩やかになった。恐らくその競争の緩和によって、学力中間層の高校生の学習時間が大きく減少しているのである（図2）⁴。

図2：高校生の学校外における平日の学習時間の推移



³ 資料「大学入学者選抜、大学教育の現状」4頁の「入学定員、入学者数等の推移【長期的傾向】」を元に作成

⁴http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryo/attach/1322874.htm

2. 問われる高等教育機関のあり方

教育再生実行会議の答申に基づき設置された「実践的な職業教育を行う新たな高等教育機関の制度化に関する有識者会議」の第1回会議（平成26年10月7日開催）に委員の1人である富山和彦氏（経営共創基盤代表取締役 CEO）から提出された資料が、いくつかのメディアに取り上げられ話題となった。その資料の一部がこれである（図3）。

図3：富山和彦氏提案資料

L型大学(含む専修・専門学校)では、「学問」よりも、「実践力」を

L型大学で学ぶべき内容(例)

文学部	シェイクスピア、文学概論	ではなく、	観光業で必要となる英語、地域の歴史・文化の考察能力
経済学部	マイケルポーター、戦略論 (教員は日本のトップ戦略コンサルタントの一人) たが、ポーターがWarrenは持ったことが無い	ではなく、	簿記・会計、弥生会計ソフトの使い方
法学部	憲法、刑法	ではなく、	道路交通法、大型第二種免許・大型特殊第二種免許の取得
工学部	機械力学、流体力学	ではなく、	TOYOTAで使われている最新鋭の工作機械の使い方

L型大学とは、ローカル経済圏にて活動をおこなう企業の成長を担える人材を育てることを想定したものであると思われるが、学問（理論）より実践力を学ぶことの重要性が提言されている。この資料を見たホリエモンこと堀江貴文氏がソーシャルメディア NEWSPICKS⁵で「まあ、もう、大学って名乗って欲しくないけど」とつぶやいていたが、筆者もこのような内容を教える教育機関が「大学」と呼ぶに相応しいものかと感じた。

⁵ 経済情報をアグリゲーション配信するソーシャルメディア。記事に対してコメントを書き込むことができる。
<https://newspicks.com/>

しかしながら、既に大学の一部では、入学する学生に対して、学問（理論）を教えることが難しくなっているようだ。簿記・会計やPCソフトの操作などの実務を教えている大学も少なくはない。また、それらを教えるための四則演算から復習する大学すらある。流石にここまでの内容になると実務以前の問題ではあるが、既に大学はこのような状況なのである。

学生が勉強しなくなり、学問からそっぽを向いているのであれば、富山氏が提言するように実践力を習得させた方が、本人にも日本経済に有益であろう。富山氏は、ローカル経済圏で活動するL型企業の労働力不足と労働生産性の低さを解消することで、国内経済は成長すると分析する（富山,2016）⁶。この分析に基づき、実践力の高い人材を社会（地域）に供給することが必要不可欠で、それがL型大学の果たす役割だと主張しているのだ。

戦略論より「弥生会計ソフトの使い方」を学んだ方が実践力が高まるとの主張にはいささか疑問が残るが、グローバル経済圏で活動するG型企業が海外に拠点を移すようになった以上、L型企業（地方の中小企業だけでなく、地方銀行や病院、福祉施設もこれに含まれる）の成長に資する人材を育成する必要があるだろう。大学は就職予備校ではないという指摘もあるが、地域や企業の課題を解決できる能力を養成することが大学の重要な機能であることは間違いない。四則演算や新書が読解できない大学生への教育も含めて、大学の教育力が問われている。（つづく）

⁶ 富山和彦（2014）「なぜローカル経済から日本は甦るのか」PHP新書

周旋家日記 13「キャリア形成について考える②ーアクティブ・ラーニングー」

乾明紀

1. アクティブ・ラーニング（能動的な学修）への質的転換

前回のマガジンでは、大学生の学修時間（大学での学びは、「学習」ではなく「学修」と呼ばれる）の短さと高校生の学力中間層の学習時間の低下を紹介した。多くの高校生が少ない学習経験のまま大学に進学し、少ない学修のまま社会に巣立っていることについて、彼ら彼女らの大学卒業後のキャリア形成と日本社会の将来に不安を感じざるを得ない。

このような現状において、文部科学省の中央教育審議会（中教審）が 2012 年 8 月に「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」¹と題する答申をおこない、大学教育と学修について質的転換を求めた。

具体的には、大学には「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が

必要である」とし、教育方法の質的転換を求めた。また、学生の学修についても質的転換を求め「学生には事前準備・授業受講・事後展開を通して主体的な学修に要する総学修時間の確保が不可欠である」とした。

つまり、大学教育の方法論としてアクティブ・ラーニング²を導入し、学生の興味関心を高め学修時間を増やし、学生の行動としてのアクティブ・ラーニングを実現することが求められたといえる。

2. アクティブ・ラーニングとはどのような行動なのか？

中教審の答申では、大学教育の質をアクティブ・ラーニングに転換するように求めたが、大学教育の方法論としてのアクティブ・ラーニングばかりが注目され、行動としてのアクティブ・ラーニングははっきりしていない。能動的に学修するとはどのような行動を指すのかが曖昧のままでは、教員は教育プログラムを組み立てることはできないし、学生はどうすればアクティブ・ラーナー（能動的学修者）になれるのかわからない。

中山（2013）³は、自己調整学習のプロセス

²中央教育審議会（2012）答申にある用語集では、次のように紹介されている。【アクティブ・ラーニング】教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

³中山留美子（2013）．アクティブ・ラーナ

¹中央教育審議会（2012）．答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」

<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm>

（2015 年 3 月 15 日）

スとしてアクティブ・ラーニングを捉え『学習者が目標設定をしてその達成のためのプランをもち、プランの各段階における自己の状態をモニタリングして学習行動をコントロールし、評価する過程』として、また同時に『学習のそれぞれの段階において、動機づけと学習方略（情報の符号化や社会的援助の要請など、学習遂行を実現するための能力・スキルの実行計画）、メタ認知（モニタリングやプランニングなど）を発動させる過程』と定義した。確かにここに書かれたプロセスを自発した学生は、アクティブ・ラーナーと呼んでよいだろう。

しかしながら、このような行動はどのように観察や測定をすればいいのだろうか。この点については多くの大学教員が手探り状態なのではないだろうか。筆者も中山と同じような視点でアクティブ・ラーニングを捉え、学習と学修におけるセルフマネジメント行動としてアクティブ・ラーニングを定義しようと試みているが、その途上である。筆者は、所属する京都光華女子大学で「大学教育再生加速プログラム（AP）」⁴の申請メンバーであり、採択後のプログラム検討のコアメンバーとして活動していることから、今後はこの取り組みも紹介しながら行動としてのアクティブ・ラーニングについて整理していきたい。

ーを育てる能動的学修の推進におけるPBL教育の意義と導入の工夫、弘前大学21世紀教育センター、21世紀教育フォーラム8、13-21。

⁴ テーマⅠのアクティブ・ラーニングで採択を受けた。採択されたプログラム名は「学習・学修マネジメント力」を向上させる学習支援体制の構築
<<http://www.koka.ac.jp/news/1096/>>
(2015年3月15日)

3. 少し脱線、大学のあり方

アクティブ・ラーニングについて徒然と述べてきたが、前回のマガジンで触れたもうひとつの話題、富山（2014）の提言への様々な反応を見て考えたことにも少しだけ触れておきたい。前回のマガジンでは、学習・学修時間の低下により学問（理論）を学修できない学生には、実践力（業務に直結する知識やスキル）を習得できる教育プログラムを提供すべきであるとの提言が富山から政府におこなわれていることを紹介した。

この富山提言は、アルファブロガーの池田（2014）⁵などがブログで取り上げたこともあり、インターネット上で大いに拡散⁶し、論争を巻き起こした。この論争について、田淵（2014）⁷は、富山提言とそれを批判する本間政雄元京都大学副学長の意見「政策提案としては荒唐無稽だ。大学形成の歴史を見ても、最初は職業訓練校から発展、大学になった学校も少なくない。実務を教えるだけではダメだという反省からだ」と大学マネジメントが専門の高橋真義桜美林大学大学院教授の意見「地域の文化的水準の

⁵ 池田信夫（2014）. G型大学とL型大学, <<http://agora-web.jp/archives/1618134.html>>（2015年3月15日）

⁶ 関西9 大学からなる報道サークル「UNN関西学生報道連盟」もこの論争を報道している。

<<http://www.unn-news.com/blog/2014/12/31/1530/>>（2015年3月15日）

⁷ 田淵義朗（2014）. 「G型大学×L型大学」一部のトップ校以外は職業訓練校へ発言の波紋, プレジデントオンライン
<http://president.jp/articles/-/14035>, 2015年3月15日閲覧

牽引、地域活性化、地域貢献をしている地方の小規模大学の役割は、過小評価すべきではない」を紹介したうえで、富山・本間・高橋の3名には地方のために大学がどうあるべきかを考えているという点で共通の問題意識があると指摘している。

大学のあり方を考えるにあたっては、教育課程だけでなく地方における大学が持つべき役割など、教育課程以外の機能を考えるおくことは大切であろう。富山提言が仮に実現されたとすれば、教育課程において大学と専門学校の区別はなくなると言える。この教育課程の専門学校化を理由に富山提言を批判する論者もいるが、実は2005年度以降、専門学校の大学化は進んでいる。この年の制度改正により、「高度専門士」⁸の称号が付与できる専門学校を卒業した者は大学院への進学も可能となるのである。つまり、このような専門学校は、大学と同等の教育課程をもっていると考えられているのである。

「方法論としてのアクティブ・ラーニング」を導入し教育課程を見直すことも大切であるが、その前に「行動としてのアクティブ・ラーニング」が何であるかを検討し、大学が育成すべき人材像を具体的にすることがあるだろう（つづく）

⁸高度専門士が付与される専門学校の要件は以下である。①修業年限が4年以上、②総授業時数が3,400時間（124単位）以上、③体系的に教育課程が編成されていること、④試験等により成績評価を行い、その評価に基づいて課程修了の認定を行っていること。
<http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/senshuu/1280727.htm>（2015年3月15日）

援助職のリカバリー

《14》

～「うちの实家は、DV だったの！？」～

袴田 洋子

今年の2月中旬、アキレス腱の部分断裂をやってしまい、人生初のギプスと松葉杖を経験しました。今ようやく心から笑い飛ばして話せるようになりましたが、実は、けっこうな「喪失」と重なり、メンタルヘルスを保つのに苦労しました。

かなり肩入れしてしまった在宅での独居の方のお看取り支援が終わったこと、2年間通った専門職大学院が終わったこと、アキレス腱断裂の保存治療のためのギプスで、卒業旅行に行けなかったことなどが要因で、「心にぽっかり穴があくというのは、こういうことか」と毎日思っていました。「なんでこんなことになってしまったのだろう」と毎日嘆いていましたが、休んでいた加圧トレーニングの再開をきっかけに、自宅でも筋トレを始めたり、専門職大学院の聴講授業が始まったりと、日常が忙しくなったことで、徐々に「寂しさ」は、薄れていったようでした。薄れていったけれども、ゼ

ロにはならないコレと、どう対峙していけばいいのか、自分の永遠の課題だなあと思います。

呪縛「甘えてはいけない」

プロのコーチングセッションを受け、コーチから「アサーション」を教えてもらい、自分の感情をコントロールしながら、「気持ちを相手に伝える」ことを学ぶ中で、「誰かの助けを借りて取り組んでみる」ということを体験していきました。

自分は援助職であり、誰かを支援するという職業に就いているわけですが、自分以外の人には、「人の助けを借りること」はOKなのに、なぜ自分は「人の助けを借りること」はダメなのか。おそらく、無意識のうちに、「支援」を「甘える」に置き換えているのだろうと推察します。他者はOKなのに、自分はダメって、なんだか矛盾しています。

子ども時代の「甘えない」のツケは大きい

「一人っ子はわがままで、甘ったれで、泣き虫」と言われ続けた自分は、とにかく、「甘えない」ことを人生の格言として生きてきました。子ども時代に、ここまで「絶対に甘えてはいけない」を意識して育つと、本当に人として、歪みます。生き方が、特に大人になってからの生き方が、本当に下手くそになります。

具体的には、人との距離感とか、コミュニケーション能力とか、人に対する操作性みたいなことですが、まあ、大人になった自分がここまで生きるのが下手くそになったのを「絶対に甘えない」ということだけが原因だったかどうかは、誰にもわからないことです。が、原因のひとつになったことだけは、断言できると思っています。

仔猫や仔犬が無邪気に甘えるように、子どもが「甘えてもいいんだ」と意識などしないで済むような環境にいられることは、たぶんけっこう大事なことなのではないかと考えます。

人生初のカウンセリングを受ける

そうして、かなりな金額をかけてアサーショントレーニングに通ったり、アスクヒューマンケアのワークショップに通ったり、歪んだ自分の修正に、時間と金を費やしました。今となっては、その内容は、かなり忘れてい

るもあり、もったいないなあと思うこともありますが、本当にその頃は、必死でした。必死で、自分の「生きづらさ」と戦っていました。

そうして、自分のコミュニケーションの修正や、自分の考え方（自動思考？）の修正を努力して努力して努力して行ってきた自分に、「ここまでやってきたんだから、そろそろ、本当に自分にご褒美をあげても、バチは当たらないよね」と思ったのが、2008年の暮れ。アダルト・チルドレン概念や、「母が重くてたまらないー墓守娘の嘆き」の著書で有名な、信田さよ子さんのカウンセリングセンターに電話をして、初めてカウンセリングの予約をしました。

電話に出た受付の女性から、カウンセリングを受けたい理由などを聞かれ、正直に「ここまで自分見つめをしてきた自分に、ご褒美をあげる意味で、カウンセリングを受けたい」と話したら、「本当は、あなたくらい整理が出来てからカウンセリングに来るのがいいのよ」と言われ、舞い上がったことをよく覚えています。

2008年12月、原宿カウンセリングセンターに初めてのカウンセリングに行きました。担当は、もちろん信田さんではなく、臨床心理士のTさん。同じ年代くらいの方で、穏やかで、誠実なその傾聴態度に、「こんなふうに利用者さんの話を聴けたらいいなあ」と若干の観察をしながら、自分のアダルト・チルドレンヒストリーを冷静な感じで話していきました。

相談援助職の技を知る

セッション中、Tさんは、非常に的確な質問を私にしていました。私が少し抽象的な表現をすると、「それは、具体的にはどういう意味ですか？」と聞いてきて、Tさんからの質問を受けて、しばしば、「えーと、そうですね…」とじっくり考えさせられました。そんなセッションを月に一度、半年ほど続けたころ、かなり「自分のことが整理できてきたかな」と思えるようになったので、そろそろカウンセリングを受けるのを一度、終わりにしようかと、なんとなく思い始めました。そして、「今日は、一度、セッションを終わりにしたい、と言ってみようかな」とちょっと心構えをして予約した時間に行きました。

「実家がDV？ マジっすか??」

それまで、自分の「今の、生きづらさ」を話すことが多かったのですが、その日は、今までに詳しく話したことがなかった、自分の原家族の話をしました。恐ろしい父親で、いつ爆発するかわからないような父親で、父親の機嫌を毎日観察している日常だった、という内容でした。すると、Tさんは、「DVですね。AC（アダルト・チルドレン）というよりは、DV。」と、つぶやくように言い、私は驚きました。それまで、それ系の類の話は、一通り勉強してきた自分だったので、実家が

DVに該当すると言われて、大変に驚きました。

恐ろしい父親だったけれども、身体的暴力として、母親を殴ったのは一度だけ、まあ、その一度だけの暴力だったけれども、逃げる母親の腕をつかんで湯のみ茶碗で母親の頭を殴る父親、のシーンは、6歳の自分にとっては、大変な恐怖の場面だったので、それ以降、父親の機嫌を観察する日常になっていったのですが、それがDVになるとは思ってもみなく、ちょっと意外な気がして、Tさんに念を押すように、「こんなんでも（こんな暴力の程度でも）DVになるんですか…」と半信半疑、半ば独り言のように聞いたところ、「恐怖、というのが、DVです。」と言われて、あっ…、と理解しました。同時に、喪失感もありました。家は、安全基地ではなかったのだなあ、ということが、なんとなく明らかにされたような気がしたからです。

カウンセラーの言葉が持つパワー

カウンセラーから、実家がDV、と言われ、半分、救われたような気分になりました。なぜなら、そんな家に育った自分が生きづらさを抱えるのは、仕方ないことであり、生まれつきに自分が粗悪品だったからではない、ということを第三者に言ってもらえたような気がしたからです。

今思えば、システム論とは真逆のような思考回路のようで、ややげんなりしますが、当時は、「私が悪いわけで

は、なかったのだ」という視点は、生きづらさを少しでも減らすことに役に立ちました。しかし、減りはしたけど、無くならないのが、やっかいなのです。

その後、この「実家はDVだった」というカウンセラーの言葉は、良いようにも悪いようにも、自分にとって、大きな影響を及ぼしたように思います。良い意味では、暴力の影響の大きさを想像できるようになったことです。身体的な暴力でなくても、大声で怒鳴られて感じる恐怖など、冷水を浴びせられたように、心が「きゅっ」と縮こまる感覚の不快さなどをよく理解できます。

デメリットは、自分の物語に自分をとじ込めてしまうことでしょうか。当時、「実家はDV」というフレームに囚われてしまい、父と母の歩んできた物語を想像することが難しくなったと思います。

自己肯定感が乏しい時に、自分のイケテナサを立証してくれるような、免罪符のような援助職の言葉は、いろいろな意味で、影響力が大きいようです。

周旋家日記 15「キャリア形成について考える④ー教員がアクティブになるための『逆向き設計』ー」

乾明紀

1. 教員のアクティブな関与

授業の中にプレゼンテーションやディスカッションの機会を設ければ、学生は座っていた状態よりも多少“身体的に”アクティブになる。言葉を発せず座っていた学生を立たせたり、横に向かせたりして話をさせるのだから当たり前である。

しかし、そのプレゼンテーションやディスカッションに学生が深く関与し、頭や思考（内的活動）をアクティブにさせ、質の高い発表や議論（外的活動）をさせようとすると、途端に難しくなる。そのためには、十分な授業準備が必要であるし、教員の教育力も向上させなければならない。

松下（2015）¹のディープ・アクティブラーニング論を参考に、図1に学習者の関与・能動性と授業との関係を整理してみたが、「深い座学」や「深い演習」を提供するためには、教員の授業への深い関与（教員のアクティブさ）が不可欠である。教員が

	内的活動が低い	内的活動が高い
外的活動が低い	浅い座学	深い座学
外的活動が高い	浅い演習	深い演習

図1 学習者の関与・能動性と授業との関係

¹松下佳代（2015）『ディープ・アクティブラーニング』,勁草書房

浅い関与でも単位が取得できてしまう授業を提供してしまうと、学生は「浅い学習」を学習してしまう。

2. 逆向き設計

近年、「深い学習」を設計する方法として「逆向き設計」(Wiggins & McTighe, 1998)²が注目されている。逆向き設計とは、従来のように教員が「何を教えるか」を考え、それを元に授業を設計するのではなく、修了時に「何ができるようになっていくか」をまず考え、そこから逆算して設計する方法である。具体的には、授業を設計する際に、第1段階として「求められる成果（結果）」を設定する。第2段階として「求められる成果」が達成できているかどうかを「確認できる証拠（評価方法）」を決定する。第3段階として「求められる成果」と「確認できる証拠」に対応できる学習経験と指導を計画する、という方法で設計される。

西岡（2005）³によると、第1段階で最も重要なことは図2の3つのレベルと照らし合わせながら目標を確認することである。「知っておく価値がある」内容とは簡単に触れる程度で良いもので、「重要な知識とスキル」は使いこなせるようになる必要がものという。また、『『永続的』理解』とは、学生が「内面化」し、詳細の大部分を忘れ

²Wiggins & McTighe（1998）、西岡加名恵訳（2012）『理解をもたらすカリキュラム設計「逆向き設計」の理論と方法 UNDERSTANDING by DESIGN』日本標準、
³西岡加名恵(2005)「ウィギンズとマクタイによる『逆向き設計』論の意義と課題」『日本カリキュラム学会紀要カリキュラム研究』第14号,15-29

てしまった後でも残るような重大な概念を指すという。また、『『永続的』理解』に達するために「熟達した答え」を単に教えるより、「本質的な問い」を中心にカリキュラムを組み立てることが大切であるとする。本質的な問いとは、「生徒が積極的に問いかけ、観念を試す実践をし、知っていると思っていたことを再考するようにさせることによって、複雑で抽象的で直感に反する概念を看破させる」ものであるという。つまり、学生自身が興味関心を高め、誤った概念や偏った思考を覆しながら、学問構造の中核に迫る「重要な概念」を見極めていくことのできる問いなのである⁴。

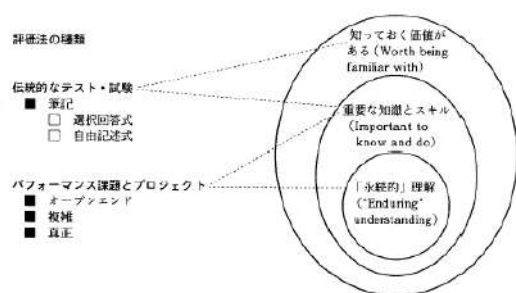


図2 カリキュラムの優先事項と評価法（西岡,2005）

第2段階は、多様な評価方法を組み合わせ、評価基準を作ることがポイントになるが、西岡（2005）が紹介する逆向き設計のためのテンプレートでは、「パフォーマンス課題」と「他の証拠」が項目として書かれている。パフォーマンス課題とは、学習者のパフォーマンス能力を完成作品や口頭発

表、実技の実演によって評価しようとデザインされた課題を指す（田中ら，2005）⁵。パフォーマンス課題では、正確な説明ができるか、有意義な解釈ができるか、効果的な応用ができるかなどで「理解」を確認することから、説明・解釈・応用・パースペクティブ（釣り合いのとれた見方・多角的なものの見方）・共感・自己認識という「理解の6側面」を評価の視点に加えることが重要であるという。

なお、パフォーマンス課題の作成手順について西岡（2009）⁶は、①単元の中核部分に見当をつける、②「本質的な問い」を明確にする、③その問いに対してどのようなレベルの答えに達してほしいか（「永続的理解」）を明文化する、④パフォーマンス課題のシナリオを作る、の4つのステップを紹介している⁷。

また、パフォーマンス課題を評価するためには、ルーブリックは欠かせない。ルーブリックとは、成功の度合いを示す数値的な尺度とそれぞれの尺度に見られる認識や行為の特徴を示した記述語からなる評価指標のことを指す（田中ら，2005）。西岡（2009）は、このルーブリック作成の進め方として①お互いの採点がわからないように、成果

⁵ 田中耕治編（2005）『よくわかる教育評価』ミネルヴァ書房

⁶ 西岡加名恵（2009）中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会児童生徒の学習評価の在り方に関するワーキンググループ（第3回）資料

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/043/siryo/1279629.htm

2015年9月4日閲覧

⁷ 田中（2005）では、アメリカのアイオワ州が示した9つのステップが紹介されている。

⁴ 本質的な問いについては、遠藤貴広（2005）G.ウィギンズの『看破』学習—1980年代後半のエッセンシャル・スクール連盟における『本質的な問い』を踏まえて—，『日本教育方法学会紀要教育方法学研究』第30巻,47-58,に詳しい。

物を採点する、②似た評点がついた成果物を集め、特徴について話し合う、という手順を紹介している。

第3段階は、「求められる結果」と「確認できる証拠」に対応できる学習経験と指導を計画する段階である。ここで重要なことは、「理解の6側面」だけでなく、図3にあるように **WHERE TO** と略記される7つの項目を考慮して指導計画を立案することであるという。

この7つの項目を見ていると、学習者中心の授業運営を目指していることがわかる。ここまで手厚く工夫された授業を提供すれば、学生の多くがアクティブ・ラーナーになる可能性が大いに高まることだろう。

して注目されている「逆向き設計」の概要を見てきた。大学でもここまでやる必要があるのかという声も聞こえてきそうだが、対人援助学の視点で大学教育を見れば、教員中心の教育パラダイムから学習者中心の学習パラダイムへの転換は望ましい変化であるといえる。対人援助職として大学教員を捉えれば、ここで紹介した設計方法などを参考にしながらアクティブに授業を設計し、学生をアクティブ・ラーナーに導くプロになることが求められているといえる。
(つづく)

W	どこに向かっているのか？なぜか？何が期待されているのか？
H	どのように生徒の関心をつかみ、維持するのか？
E	生徒たちが「重大な観念」と「本質的な問い」を探究するよう、どう助けるか？期待されるパフォーマンスに向けて、どのように生徒たちを用意させるか？
R	どうやって、生徒たちが再考し、改訂するよう手伝うか？
E	生徒たちはどのように自己評価をし、学習を振り返るか？
T	学習をどうやって様々なニーズ、関心、スタイルに合わせて調整するか？
O	どのように学習を組織し、順序だてるか

図3 学習経験と指導を計画する上での注意事項（西岡,2005）

3. 最後に

「深い学習」を設計する方法のひとつと

周旋家日記 16「キャリア形成について考える⑤ーワークショップの3つのかたちー」

乾明紀

1. 工学的アプローチと羅生門アプローチ

前回のマガジンでは、学習者に「深い学習」を促すために、また教員をアクティブにするために「逆向き設計」(Wiggins & McTighe, 1998)¹が有効であることを述べた。逆向き設計とは、名前のとおり、まず教育プログラムのゴール(到達目標)を明確にし、そこから逆算してプログラム内容を考える方法である。

このような教育手法を実践するためには、感覚やセンスに頼るだけでなく、教育目標を分解したりプロセスを明確にしたりする工学的思考が重要となる。

授業の開発や運営は、工学的に進めるのか感覚やセンス(つまり即興性)を重視して進めるかでプロセスが大きく異なる。この点について、アトキン(Atkin, J.M.)は「工学的アプローチ」と「羅生門的アプローチ」²という視点で整理した。アトキンは、1974年に文部省と経済協力開発機構(OECD)の教育研究革新センター(CERI)との共催による「カリキュラム開発に関する国際セミナー」において、カリキュラム・授業・評価にかかる典型的なモデルとして

2つのアプローチを提案した(図1参照)³。

図1に示したように、工学的アプローチでは、ニーズアセスメントの後に、一般的目標の設定→特殊(具体的な)目標の設定→行動目標の設定→教材開発→教授・学習活動→行動目標に照らした評価の順に教育活動が進む。一方、羅生門的アプローチは、一般的目標の設定→創造的教授・学習活動→記述→一般目標に照らした評価の順に進む。

一般的手続き	
工学的アプローチ 一般的目標 (general objective) ↓ 特殊目標 (specific objective) ↓ 行動的目標 (behavioral objectives) ↓ 教材 (teaching materials) ↓ 教授・学習過程 (teaching-learning processes) ↓ 行動目標に照らした評価 (evaluation based on behavioral objectives)	羅生門的アプローチ 一般的目標 (general objective) ↓ 創造的教授・学習活動 (creative teaching-learning activities) ↓ 記述 (description) ↓ 一般的目標に照らした判断評価 (judgement against general objectives)

¹Wiggins & McTighe (1998), 西岡加名恵訳 (2012)『理解をもたらすカリキュラム設計「逆向き設計」の理論と方法

UNDERSTANDING by DESIGN』日本標準,
²羅生門的アプローチの名前の由来は、黒澤明が芥川龍之介の小説「藪の中」をモチーフに映画化した「羅生門」と重なることから命名された。

³田中耕治編(2005)『よくわかる教育評価』ミネルヴァ書房

評価と研究	
工学的アプローチ 目標に準拠した評価 (goal-reference valuation) ↓ 一般的な評価枠組み (general schema) ↓ 心理測定的テスト (psychometric tests) ↓ 標本抽出 (sampling method)	羅生門的アプローチ 目標にとらわれない評価 ↓ さまざまな視点 ↓ 常識的記述 (common sense description) ↓ 事例法 (case method)
(目標、教材、教授・学習過程)	
工学的アプローチ ・目標:「行動的目標を」、「特殊的であれ」 ・教材:教材のプールからサンプルし、計画的に配置せよ。 ・教授学習過程:既定のコースをたどる (predecided) ・強調点:教材の精選、配列 (design of teaching materials)	羅生門的アプローチ ・目標:「非行動的目標を」、「一般的であれ」 ・教材:教授学習過程の中で教材の価値を発見せよ ・教授学習過程:即興を重視する (impromptu) 強調点:教員養成 (teacher training, inservice training)

図1 工学的アプローチと羅生門的アプローチ

このように、工学的アプローチは、教材の事前準備が重視され、羅生門アプローチでは、創造的な授業（＝運営できる教員の養成）が重視される。

この2つのアプローチは決して対立するものではなく、必要に応じて使い分けることが重要なのであるが、教育実践者のおかれた立場などによりしばしば対立することがある。例えば、小野沢（2005）⁴は、工学的アプローチには次の4点の問題があると指摘する。①学習プロセスが定式化されることにより学習者の主体的、創造的追究活動の限界性、②教員の教授内容と子供の学習内容の間に生じる差異と成果の限界性、③学習の副次的効果の発生の抑制、④教員の視点・観点に限定される評価の限界性である。小野沢はこの4つに問題点を根拠に「総合的な学習の時間」には、工学的アプローチではなく羅生門アプローチが相応しいと指摘する。

一方、佐藤（2007）⁵は、羅生門アプローチの有効性を認めながらも「教員の人格や教授・学習過程における即興性というものは、伝えることはできても、教えることはできない」ことから、大学のFD活動を推進するためには「工学的アプローチ」が相応しいと指摘する。

このように2つのアプローチには一長一短がある。繰り返しになるが、必要に応じて使い分けることが重要なのである。

2. ワークショップの3類型

では、この2つのアプローチはどのような

⁴小野沢美明子（2005）「総合的な学習の時間」の「工学的アプローチ」批判：「羅生門的アプローチ」を支える評価観転換の必要性,教育學雑誌（40）, 33-47

⁵ 佐藤浩章「工学的アプローチと羅生門的アプローチ」, ファカルティー・ディベロップー日記, 2007年04月18日

http://blog.livedoor.jp/sandy_sandy/archives/51118372.html 2015年11月30日閲覧

に使い分ければいいのであろうか。この点について、2015年10月30日の対人援助学会で筆者が企画したワークショップにおける荒木寿友先生の「ワークショップの3類型」⁶は大いにヒントになったので紹介させていただく（今後、発表集も作成予定）。

ワークショップとは、講義などの一方的な知識伝達スタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学び合ったり創り出したりする学びと創造のスタイル（中野,2001）⁷であるが、「総合の学習の時間」や一般的に言われている「アクティブラーニング型の授業」などで用いられる学習スタイルである。PBL（Project Based Learning）も広義のワークショップと捉えることもできるだろう。

さて、このワークショップについて荒木は、次の3つに類型化した。

①ワークショップ 1.0

到達目標が予め決定しており、その到達点に参加者が至るべく、ファシリテーターが具体的なワークショップスケジュールを準備できるもの。最初に何をやって、次に何をするか、構造化されているワークショップ。明示的なカリキュラム。伝えたいことと、結果として参加者が学ぶことの相違が比較的少ない。

②ワークショップ 2.0

一般的な目標は決まっているものの、結

果として具体的に何が生じてくるかは予想出来にくく、参加者がその場で「答え」となるものを紡ぎ出していくワークショップ。全体的の流れは明示的であるが、結果として現れてくる成果はワークショップが始まった段階ではわからない。

③ワークショップ 3.0

参加者の興味や関心に応じて、その場で何をするか決定し（文脈に応じた目標設定）、比較的長時間かけて目標を図ろうとするもの。OST⁸の場合、問いの真正性（りあるさ）があり、当事者としての参加者が課題可決に向かう。ファシリテーター側の予想以外の学びが生じる場合が多い（隠れたカリキュラム）。参加者とファシリテーター双方に、即興性と創造性が重要視され、求められる。

このようにワークショップにおいても構造化された手法（ワークショップ 1.0）から参加者の主体性を頼りに実施する手法（ワークショップ 3.0）まで、目的に応じて開発されている。

学生にワークショップ型の授業を提供するためには、このような類型を参考に目的や目標に応じて配置する必要があるだろう。ワークショップ経験の乏しい学生や十分な知識・スキルのない学生がワークショップ 2.0や3.0に参加しても教員が思うほどアクティブに思考したり活動したりしないケー

⁶ 荒木寿友（2015）「形式で分けるワークショップの3類型さまざまな場でのワークショップを可能とするために」,対人援助学会第7回年次大会企画ワークショップ「『緩やかな所属による組織活動』における人材支援について」配布資料

⁷ 中野民夫（2001）『ワークショップ—新しい学びと創造の場—』岩波書店

⁸ 1985年ハリソン・オーウェン（Harrison Owen）によって提唱された「自発的な自己選択」に委ねられたワークショップ手法。参加者自らが問題解決したいテーマを提案して仲間を募り、対話などを行いながら、プロジェクトを創出していく（参考：株式会社ヒューマンバリューHP <http://www.humanvalue.co.jp/report/positiveapproach/03.html> 2015年11月30日閲覧）

スがある⁹。また、経験が豊富だったり創造性を発揮したいと思っていたりする学生に構造化されすぎたワークショップは退屈極まりないものになるだろう。

ワークショップを提供する際は、学生のレディネス（準備性）の把握は非常に重要となる（もちろん教員の授業準備や準備性、即興性も）。このことから“ワークショップ＝アクティブラーニング”という認識は改めていく必要がある。

3. 最後に

中等国語教育の実践・研究者として有名な大村はま¹⁰は、ワークショップの実施や運営、アクティブラーナーの養成にもヒントになる次のような指摘をしている。

「話し合いは『悪い癖』がついてしまいますと、まず直すことは不可能です。話し合いに対する興味を失い、その重要性を軽蔑するようになってしまいます。話し合いなんて時間つぶしでつまらない。みんな聞いてもきいても黙っていて、何も言わない人がいるとか、愉しく話せないとか、話し合っても、結局は、自分で考えたのと同じだ。話し合いがなくても、結局自分自分でやればいいんだ、とそういうふうになってしまいます。」（大村,2005）¹¹

つまり、豊かな話し合いを可能とする『良い癖』が作られたり、その癖が発揮されたりする場を作らないと、非アクティブな価値観を生産してしまうのである¹²。学生をいきなりワークショップ 2.0 スタイルに放り込むのではなく、学生が 1.0 と 2.0 を選択できるようにするのが良いのではないだろうか。どの大学であれ学生のコミュニケーション能力は様々である。“アクティブラーニング＝ワークショップ 2.0 に放り込む”という認識を改め、学生のレディネスに応じたワークショップを選択できるように提供することが、学生をアクティブラーナーにするためには必要ではないだろうか。（つづく）

⁹ フリーライダーとなる学生の存在のほか、学生が何を学んでいるかわからないようなワークショップを開催すれば「這い回る経験主義」との批判を受けることになるだろう。

¹⁰ 鳴門教育大学附属図書館 HP 参照

<http://www.naruto-u.ac.jp/library/shiryo/002001.html>

2015 年 11 月 30 日閲覧

¹¹ 大村はま（2005）『教室に魅力を』国土社（新装版）

¹² ここで紹介した大村はまの指摘とネガティブな価値観の学習の問題点については、中原淳が MANBA-LAB ブログで指摘している。

http://www.nakahara-lab.net/2013/06/post_2024.html

2015 年 11 月 30 日閲覧

周旋家日記 17「キャリア形成について考える⑥ー自己管理（セルフマネジメント・セルフコントロール）ー」

乾明紀

1. 難しい自己管理

昨年の4月、友人が新しい教育支援サービスを始めた。高校中退後、偏差値30台であったこの友人は、独自の学習方略を確立し、早稲田大学に見事合格した。さらに、この独自の学習方略を2チャンネル¹に投稿したことで、多くの受験生から「受験の神」と称された。そんな受験の神が始めた教育支援サービス²の内容は、簡単に言えば受験生の自己管理（セルフマネジメントあるいはセルフコントロール）支援であった。

自己管理とは、①自分の行動を、②自分自身の行動によって、③好ましい内容（行動）に変化させ、④自分が望む結果の生成を目指すことである。学習成果の向上やキャリア形成上の成功は、この自己管理の成否にかかっているといっても過言ではない。しかし、誰もが経験したことがあるように、高い目標を達成するための自己管理は難しいものである。故に友人の教育支援サービスがビジネスとして成立する訳であるが、それほど自己管理は難しい。

高い目標に到達するためには、時に楽しいことを避け、楽しくない行動を増やすことが必要となる。しかしながら、このプロセスには、苦労（コスト）や苦痛が伴う場

合が多い。そして、この苦労や苦痛により必要な行動は先延ばしにされ、自己管理が機能しなくなる。恐らくこのプロセスが典型的な失敗パターンではないだろうか。

また、自己管理を難しくさせているもうひとつの原因として、自己管理の成否を精神力の強弱によるものと捉える「迷信」のような思い込みが挙げられる。例えば、「勉強がコツコツできないのは精神力の弱さだ」と、「精神力の弱さ」を勉強という行動が起こらない理由だと捉えてしまうような場合である。このように捉えると行動の原因を分析することや行動を改善するためのアイデアはでてこなくなる。

さらに、「勉強しない人＝精神力の弱い人」、「勉強する人＝精神力の強い人」というようなレッテル（ラベル）を貼ること（ラベリング）で、自己管理に失敗した際に自らを責めてしまうという弊害もある。

行動による 自己管理アプローチ	精神論による 自己管理アプローチ
①自分の行動を	
②自分自身の行動によって	②自分自身の精神力によって
③好ましい内容（行動）に変化させ	
④自分が望む結果の生成を目指す	

図1 2つの自己管理アプローチ

2. 行動による自己管理アプローチ

「自分の行動」を制御するものが「自分自身の精神力」という神秘的で手の届きにくいものとして捉えるのではなく、「自分自身の行動」にあると考えるとちょっとした工夫（環境設定）で行動は変化できることが知られている。

¹ このスレッドは「早稲田への道」
<http://babayuhei.sakura.ne.jp/r2wsd/wasedahenomiti1.html>

² センセイプレイス
<http://www.senseiplace.com/>

例えば、「早起き」という行動であれば、①「起きる」という行動を、②「目覚まし時計をセットする」という行動によって、③「早起き」という行動に変化させ、④自分が望む結果（「早起き」）を生み出すことができる。また、友人の教育支援サービスを受ける受験生をここに当てはめると、①「勉強する」という行動を、②「教育支援サービスを受ける」という行動によって、③「よりの確な学習方略に基づく勉強」という行動に変化させ、④志望する大学への合格を目指すということになる。

3. 自己管理の手法

自分自身の行動による自己管理の代表的な手法として、（１）刺激性制御、（２）自己監視、（３）自己教示、（４）自己契約、（５）自己強化と自己罰がある（杉若, 2011）³。

（１）刺激性制御とは、きっかけを変化させる行動である。甘いものを控えるためにお菓子を見えなくすることやポストイトで予定を書くことなどがこれに該当する。

（２）自己監視とは、自らの行動結果をモニターする行動である。家計簿をつけたり、運動のフォームを録画して確認したりすることが該当する。

（３）自己教示は、行動を変化させる「ことば」を自分自身へ語りかけることである。失敗が許されない場面で、「焦らない、落ち着いて、大丈夫」などと語りかけることが該当する。

（４）自己契約は、自らがこれから実施する行動変容の内容とその結果に対する報酬や罰などについて他者と取り決めに交わす行動である。「次のテストで 90 点以上だったらおもちゃをひとつ買って」と子どもがせがむのも自己契約と言える。

（５）自己強化は、行動に強化子を随伴させる行動であり、自己罰は行動に嫌悪刺激を随伴させる行動である。強化子とは行動を増やすことのできる刺激で、本人の喜びや嬉しさにつながるものが多い。また、随伴とは、行動に刺激が伴ったり、行動の直後に刺激を受けたりすることを言う。宿題をしたご褒美におやつを食べたり、大好きな恋人と一緒に勉強したりすることが自己強化に該当する。行動に嫌悪刺激を随伴させることは弊害も多いことが知られており、自己罰より自己強化による自己管理の方が望ましい。

また、これらの手法の他に、他者の存在を活用した自己管理がある。友人が始めた教育支援サービスを受ける受験生がそうである。友人によるとこのサービスで受験生が勉強するようになるのは、学習コーチが受験生の学習行動を見守るからであるという。受験生と学習コーチが直接会話するのは週 1 回 60 分だけであるにも関わらず、その際のアドバイスと受験生から学習コーチへ学習行動を報告するというタスクにより、孤独な受験勉強も維持・継続されている。

以上、これらの手法を上手に使い分けることができれば、自分の行動は確実に変容し、その結果としてキャリア形成の質も高まっていくのである（つづく）。

³杉若 弘子 (2011). できない,でも(少しは)できるようになりたい:セルフ・コントロールの臨床心理学. 心理臨床科学 1(1), 17-20

援助職のリカバリー

《18》

～「断捨離」は、やっぱり「前向き」になる！？～

袴田 洋子

《「片付けない夫」に腹立てる》

5月の連休中に、数年ぶり？に、ハデな夫婦げんかをしました。別れたいけど、経済的に無理だよなあと、何度も思いました。でも、世のシングルマザーたちは、もっとギリギリの収入の中で、母子家庭をやっているのだらうと思い、自分の根性のなさを情けなく思いました。同時に、別れたら、さみしい生活になるのかなあ、でも、気楽かなあとか、いろいろ思いました。夫婦げんかのきっかけは、「部屋の片付け」です。うちは子どもがいない夫婦ですから、「親として、多少はきちんとしてなくちゃ」感がゼロ、お互い実勝手に生きてきた夫婦で、「夫婦で協力しあいながらやっていく」ということをやってきていないよな、と前々からなんとなく思っていました。問題が起こった時に、協力しあって「解決に向けて努力する」をやってきていな

い我ら夫婦が（私だけか？）、今回、離婚の危機を迎えたわけです。

《世は「解決したい夫婦」だらけ》

ネットで、「夫婦 別居 解決 回避 別れたい」などのキーワードで検索をかけて、みなさん、どうしているのか調べてみると、まあ、出るわ出るわ、アドバイスや経験談、離婚カウンセリングなど、様々な情報がヒットしました。正直、「ああ、自分だけではないんだな、沢山の人が同じことで悩んでいるんだ」と妙な勇気も出ました。

その中で「3つのステップで夫婦関係を改善しよう」というサイトに目が止まり、これを印刷して夫に渡し、「ちょっとお互い、考えよう」と言いました。まあ、その後の細かい展開は省きますが、結果として、別居は回避、「親業」をしていない私たち夫婦が、少しだけ「大人」になれたかもしれない感

じでしょうか。「自分たちの家を維持していくのは、自分たちしかいない」という自覚が持てたというのか。仕事や自分の趣味だけに時間を割いていた二人が、「自分たちの暮らし」に少し目を向けられた感じというのか。よって、かつてない勢いで、断捨離を実行できています。今の自分に不要なモノをどんどん捨てて、「居心地のよい住まい」に向けて、行動しています。

ずっと持っていた大好きなマンガ本は、「家裁の人」を残して全部処分、DVDは「バグダッド・カフェ」「あの日、欲望の大地で」など数本を残して処分しました。バリューブックスのチャリボンというシステムで買取をしてもらい、売れたお金は福祉団体に寄付することができました。そんなこんなで、勝手気ままに生きてきた子ナシ夫婦が、「お片づけができるオトナ」にちょびっと変化した5月でしたが、「家族って、夫婦って、いったい何だろう」と沢山考えた1ヶ月間でした。

《「片付けられない女」恐怖症》

今回、夫婦げんかのきっかけとなった「部屋の片づけ」は、長年、私が囚われているものの一つであり、自己肯定感を低くするものの一つと言っても過言ではなかったでしょう。ネットでポチポチすればすぐにモノが買える時代、持ち家の悲劇は、家の容量は、

決まっているということです。買ったから買った分だけ、家のスペースは狭くまる。買ったら何かを捨てないと、どんどんモノに占領されていってしまう持ち家は、引越し断捨離ができないので、いつの間にか、ごちゃごちゃした空間になっていきます。

この「モノが多く、いつもなんだか、ごちゃごちゃしている家」は、「片付けられない私は、ダメな人間なんだ」という思考回路を生み出し、劣等感を増幅させます。これは、もしかしたら、男性には無い感覚なのかもしれません。私が「片づけなきゃ片付けなきゃ」と思って、休日にパタパタしている横で、夫は、一日中、PC開いてネットやってりゃ、イライラするのは私だけでは無いでしょう。「家をきれいにしておかなければ」という呪縛は、女性にだけかけられているのかも、と今回、改めて思いました。

《念願の「断捨離」に挑む》

この、「モノをいかに捨てるか」ということに対して、本気で取り組みたいと思っていた私は、断捨離の教祖の一人、やましたひでこさんのDVD付き本を購入（実は、Kindleで断捨離の本を買っていたが、読んでいなかった、というか買ったのも忘れていた）、本を読むのは時間がかかるので、手っ取り早くDVDを観て、「今の自分に必

要なものだけ残す」というフレーズだけを記憶し、まずは、食器棚の断捨離を始めました。景品でもらったマグカップとか、箱に入ったままの引き出物の食器とか、使ってない大量の食器をまずは捨てて、すっきりした食器棚を見て、「ああ、いい感じ」と心地よくなりました。

次は服の断捨離。ちょうど、がつつの冬物は着ない時期になっていて、「この冬に着なかった服」をぼんぼん重ねて、紐でくくっていきました。その次の断捨離が、リビングに敷いていたタイルカーペット。そして、次が、今回の本と DVD。昨日は、ずっと処分できずにいた人形を、人形供養の神社に宅急便で送りました。実は、DVD を処分するのは、ちょっとためらいがありました。映画は基本的に好きなので、その中でも、もう一度観たい、手元に置いておきたいと思った映画を購入したわけなので、「本当に捨てていいの？」と自分に問いました。そして、なぜ、「映画・DVD を手元に置いておきたいのだろう」と考えました。

《元気になるのに、必要な「量」》

基本的に、私が購入した映画の DVD は、「楽しい」「嬉しい」「ハッピーになる」的なストーリーのものです。言い換えると、その映画を観れば、自分が元気になる、というもののなのかも

しれません。「映画を観て自分が元気になる」ために DVD が必要だった、ということであるならば、DVD を捨てるということは、今後、自分が元気を無くした時に、元気を取り戻すための方法・ツールが無くなるということです。でも、そんな時に役立ったフレーズは、「今の自分に必要なものだけを残す」です。今、ではなく、未来の自分が落ち込んだ時に元気を出すために、こんな、何十本もの DVD が、自分には必要、、ではないよな、と冷静に判断することが出来たのは上出来でした。こうして、数本の DVD を残して、バリューボックスのチャリボンに送り、約 1 万 2 千円の買取金額を寄付することが出来ました。捨てる行為も、役に立てたと思います。

周旋家日記 18「キャリア形成について考える⑦—シチズンシップ教育①

乾明紀

1. シチズンシップへの注目

筆者は、所属大学の全学必修科目「シチズンシップ」を担当しているが、筆者が大学生だった頃（25 年ほど前）、スポーツマンシップは聞いたことはあっても、シチズンシップという言葉は聞いたことはなかった（と思う）。英語では citizenship と書くが、市民を意味する citizen と形作るを意味する ship から出来た言葉である。以前は、「市民権」「公民権」などと和訳されることもあったが、近年は英語の語感に近い「市民性」として和訳され、「市民社会でいかに振る舞うか」という概念で捉えられることが多くなった¹。

1990 年代ころから、このシチズンシップを育む教育（シチズンシップ教育）への注目が高まっている²。イギリスでは、ブレア政権が 1997 年に全国共通のカリキュラムでシチズンシップ教育を必修科目化した。当時のイギリスは、若者の政治的無関心や低投票率、学校の無断欠席や反社会的行為の増加という「若者の疎外」が問題となっていた。さらに、移民の増加などにより多文化・他民族社会が進んだこともその背景にあった。

また、アメリカでは、ボランティアや地域コミュニティでの活動の減少が見られた

ことと、グローバル化する経済活動に対応できる人材養成の必要性という視点からシチズンシップ教育が見直され、1994 年以降、州政府などにより「教育スタンダード」（公教育を通じて子どもに身につけさせたい内容や資質を定めたもの）³が定められた。

日本においては、情報化、国際化、価値観の多様化、核家族化、高齢化などが進展などの社会変化に対応する観点から 1989 年に「新しい学力観」に基づく学習指導要領の改訂が行われ、イギリスやアメリカのシチズンシップ教育で求められる能力の育成も重視されるようになった。

2. 新しい学力観

「新しい学力観」とは、社会の変化に対応して主体的に対応することのできる能力の育成を目指し、「知識・理解」よりも「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」に重点を置くものであり（田中，2005）、教育課程審議会（1987）で答申された以下のねらいを受けて出された学力観である。

- ①豊かな心をもち、たくましく生きる人間の育成を図ること
- ②自ら学ぶ意欲と社会の変化に対応できる能力の育成を重視すること
- ③国民として必要とされる基礎的・基本的な内容を重視し、個性を生かす教育の充実を図ること
- ④国際理解を深め、わが国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視すること

¹シチズンシップ教育ネット

<http://www.citizenship.jp/citizenshipedu/>
2016 年 5 月 31 日閲覧

²橋本将志(2013)日本におけるシティズンシップ教育のゆくえ,早稲田政治公法研究, 第 101 号,63-76.

また、学習指導要領の改訂に伴い、以下

³田中耕治編（2005）『よくわかる教育評価』ミネルヴァ書房

の教育課程の改革が行われた。

- ①道徳教育の内容の重点化と道徳的実践の指導
- ②小学校1・2年に「生活科」の設置
- ③中学校で選択教科の拡大と習熟度別指導の導入
- ④高校の従来の社会科を「地理歴史科」と「公民科」に再編。世界史を必修化
- ⑤高校家庭科を男女とも必修化

3. シチズンシップ教育とキャリア教育

これまで述べてきたように、1990年代ころからヨーロッパ、アメリカや日本などでシチズンシップ教育への関心が高まった。この背景について、小玉（2015）⁴は次の3つの要因があると指摘している。

- ①社会の変化を踏まえた、学校教育の変化
- ②多文化社会の到来
- ③学校が生徒を「大人」にして社会に送り出す必要性の増大

シチズンシップ教育への注目を高めた3つの要因の中のうち、「学校が生徒を『大人』にして社会に送り出す必要性の増大」という点は、近年のキャリア教育の質的变化の要因であるともいえる。例えば、2003年に文部科学大臣、厚生労働大臣、経済産業大臣、経済財政政策担当大臣が取りまとめた「若者自立・挑戦プラン」は、「若年者の働く意欲を喚起しつつ、全てのやる気のある若年者の職業的自立を促進し、もって若年

⁴ 小玉重夫（2015）「政治的リテラシーを身に着けることで能動的に政治に関わる市民を育成」河合塾 Guideline11月号

失業者等の増加傾向を転換させる」ことを目的に、学校教育と職業生活との接続を改善しようとした。

キャリア教育もシチズンシップ教育も「学校が生徒を『大人』にして社会に送り出す」という点では共通しているが、前者は「社会」を職業生活と捉え、後者は「市民社会」と捉えている点が両者の大きな違いである。例えば、イギリスのシチズンシップ教育では、「社会のおよび道徳的責任」、「共同体参加」、「政治リテラシー」の3点が教育の大きな柱（クリック・レポート）⁵としているが、「政治リテラシー」を特に重要視しているのが特徴である（図参照⁶）。イギリスのシチズンシップ教育は、既存の社会や国家にとって都合の良い「品行方正な市民」（グッドシチズン）を目指すにとどまらず、能動的な市民（アクティブシチズン）の育成を目指しているのである。

4. 政治的リテラシー

政治的リテラシーについて、日本の学校教育では十分に育成してこなかった。教育基本法第14条第2項にある「法律に定める学校は、特定の政党を支持し、又はこれに反対するための政治教育その他政治的活動をしてはならない」を過度に意識するあまり、社会的・政治的な課題に距離をとってきたのである⁷。生徒や学生の生活や将来に

⁵ 1998年のイギリス政府答申「学校における民主主義とシチズンシップ教育」の呼称。

⁶ バーナード・クリック（2011）「シチズンシップ教育論」法政大学出版社

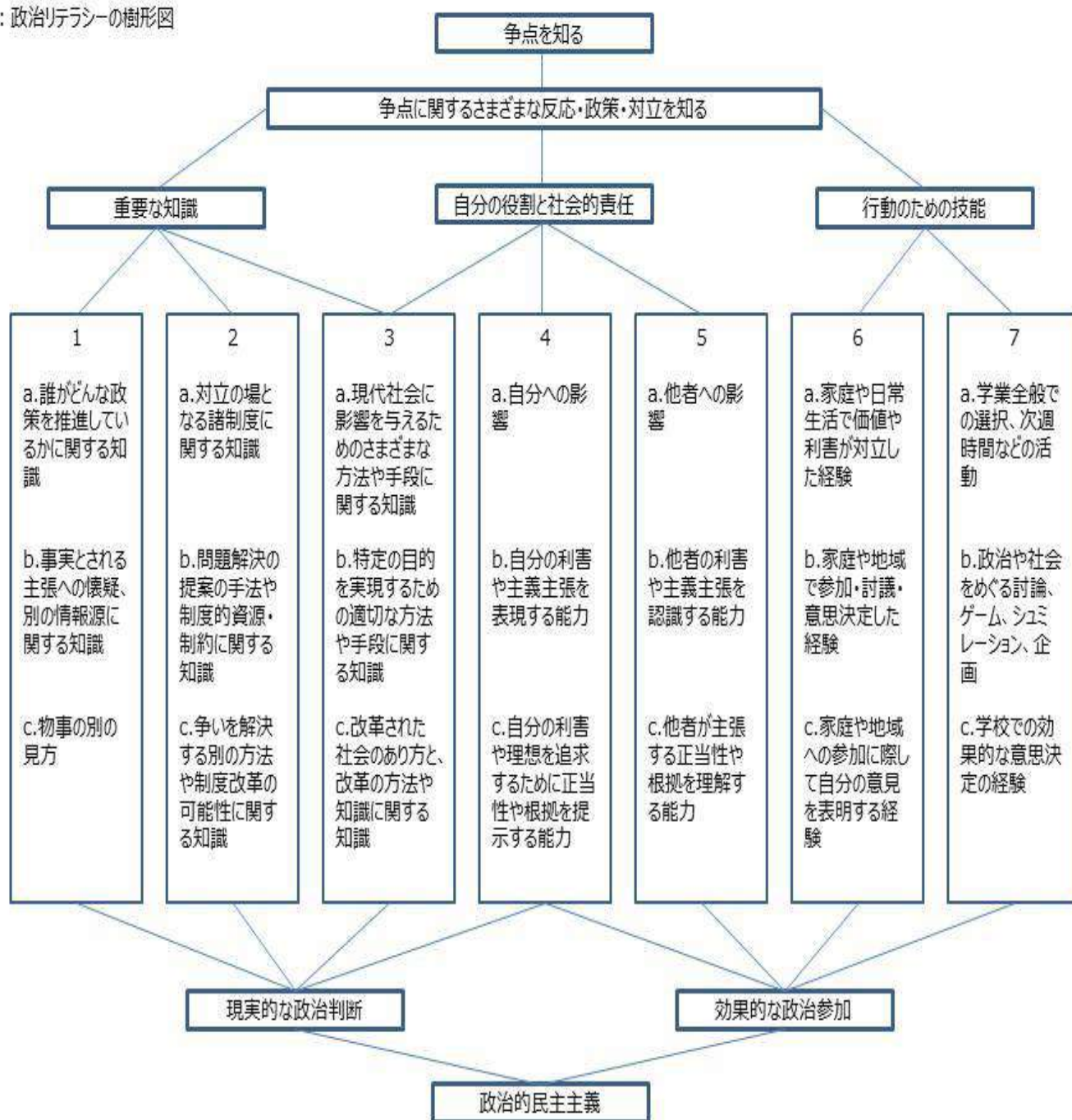
⁷ 京都市教育委員会（2016）「政治的教養を育む教育を進めるにあたって～小学校・中学校・高等学校の発達段階に応じた政治的教養を育む教育にかかる学習指導案集～」平成28年3月

影響を与える政治は身近な存在にしておく必要があったにも関わらず、我が国ではそれができていなかった。つまり、学校は、生徒に政治的リテラシーを身につけた「大人」にして社会に送り出すことはできていなかったのである。

しかし、2015 年 6 月に選挙権年齢を 18

歳以上に引き下げる「公職選挙法等の一部を改正する法律」が成立したことにより、政治的リテラシーの育成は急務となった。筆者のところにも複数の高校からこの能力を高めるための出前講義の依頼が入った。(つづく)

図：政治リテラシーの樹形図



バーナード・クリック (2011) 「シティズンシップ教育論 政治哲学と市民」 (法政大学出版局)

★★周旋家日記 20★★

「キャリア形成について考える」 ⑨ トランプ勝利から見えてきたこと 乾明紀

1. アメリカ大統領選の衝撃

11月8日に行われたアメリカ大統領を決める一般投票は、大方の予想を裏切りドナルド・トランプ氏が勝利した(図1)。

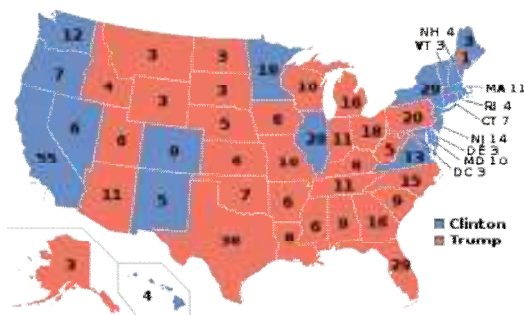


図1 2016年 アメリカ大統領選挙(一般投票)の結果(Wikipediaより)

日本で暮らしていると、メディアを通じてアメリカの国内事情を理解し、その報道を通じて大統領選の行方を予想することになるが、トランプ氏は当初共和党の泡沫候補にすぎなかった。

不動産ビジネスで成功し、人気テレビ番組の司会者でもあったトランプ氏はセレブリティ(著名人)ではあったが、政治家としての実績は全くなかった。しかも過激な言動が多く、オバマ大統領が誕生した際の感動を記憶している者からすれば、対立を煽る彼の言動は受け入れ難いものがあった。

しかし、トランプ氏は勝利した。共和党の泡沫候補と言われた彼が、アメリカ初の女性大統領を目指したヒラリー・クリントン氏を破ったのである。

このニュースは、イギリスの国民投票によるEU離脱と同様に驚きをもって迎えられた。

民主主義の先進国で行われたイギリスの国民投票もアメリカの大統領選挙も最後は“良識”ある判断を国民が行い、EU残留、クリントン勝利という結果が大方の予想ではなかっただろう。

2. トランプ勝利の背景

イギリスの国民投票とアメリカの大統領選挙(一般投票)では、制度が異なるため民意の反映方法が異なる(アメリカ大統領選挙の一般投票は、一部を除いて州ごとに大統領を選択するため、多くの州を制したトランプ氏が勝利したが、得票率もクリントン氏の方が多かった)が、ルールどおりの“結果”から見れば、国民は現状の枠組みに“NO”を突きつけ、政治に大きな変革を求めたことになる。

なぜ多くイギリス人やアメリカ人が政治に変革を求めたのだろうか。ここでは反トランプ、反共和党であったマイケル・ムーア監督が7月の時点で語った“トランプ氏が勝利する5つの理由”を紹介しながら、その背景を見ていきたい。トランプ勝利を予想した数少ない日本人ジャーナリストの一人木村太郎氏は、このムーア監督の見立ても大いに参考にしたという。

マイケル・ムーア監督は、「ボーリング・フォー・コロンバイン」や「華氏911」などのドキュメンタリー映画を製作したことで知られ、アポなし取材によってアメリカ社会や政権の問題点に鋭く切り込む作品は高い評価を得ている。「華氏911」では共和党のブッシュ政権を痛烈に批判した彼が、一般投票の4か月前には次のようにトランプ氏の勝利を予想していたのである¹。

理由①: 中西部の票数、ラストベルトに歓迎され

¹ <http://michaelmoore.com/trumpwillwin/>
日本語訳
http://www.huffingtonpost.jp/michael-moore/5-reasons-why-trump-will-win_b_11254142.html

ている

ラスト(rust)とは金属の錆のことを指す。かつて自動車産業などの製造業がアメリカ経済を牽引していたが、1960年代以降の自由貿易の拡大(経済のグローバル化)により産業の構造変革を求められたきたのがこの中西部だ。製造業で働く人々が多かったミシガン、オハイオ、ペンシルベニア、ウインコンシンは、労働組合も強く民主党支持者が多いブルーステート(民主党の州)であった。

しかし、ムーア監督は「このあたりの人は、イングランドの中流階級と同じだ。疲弊して、元気がなく、苦しんでいる」という。そして、クリントン氏がNAFTA(北米自由貿易協定)とTPP(環太平洋戦略的経済連携協定)を支持したことで、自由貿易(経済のグローバル化)の恩恵を受けることができなかった4つ州の票がトランプ氏に流れることを予想した。

また、「トリクルダウン理論」²に騙されて辛い思いで働いている(あるいは働き口がない)労働者は、「怒りのメッセンジャー」としてアウトサイダーのトランプ氏に票を投じるとも彼は言った。

経済のグローバル化に伴う貧富の格差を是正できない政治に対する不満が先進国に渦巻いている。また、中流階級の先行きに対する不安も高まってきている。この中流階級の怒りや不安が、「EU脱退」やトランプ氏の勝利を後押しした。

理由②:白人男性の最後の抵抗

ムーア監督は、アメリカで240年間続いていた男性主導社会の終焉が、白人男性をトランプ氏支持に走らせたという。男女教育機会均等法以降、女性の社会進出が進み、パイロットにもなれる時代となった。男性中心の考えは容認されなくなったと男性自身も認識している。しかし、フェミニストに

² 富める者が富めば、やがて貧しい者まで富むという経済理論

征服されることに抵抗を覚える白人男性にとって、黒人大統領に8年間耐えた後の女性大統領の誕生は受け入れ難く、「その後の8年間は、ゲイがホワイトハウスに入るのか!それからトランスジェンダーか!」というのが彼らの本音でもあるという。

今回のトランプ氏勝利の背景に、オバマ政権下で加熱した「ポリティカル・コレクトネス」³への反発がある。俳優で映画監督でもあるクリント・イーストウッドは、「俺たちは今、お世辞だらけの時代に生きている」と過剰に自己規制を求める社会を批判し、トランプ支持を表明した⁴。

理由③:ヒラリーの問題

ムーア監督によると、ヒラリー氏は旧来の政治の象徴であり、有権者の約70%が、彼女を信用ができない不誠実な政治家だと考えているという。そして、ミレニアル世代⁵の若い女性が最大の反ヒラリー派になっていると指摘する。

皮肉にも若い女性の多くが、元ファーストレディで大金持ちのヒラリー氏を自分たちのような女性を代表する候補者ではないと考えているのだ。

理由④:意気消沈したサンダースの声

民主党の予備選挙で善戦したバーニー・サンダース氏。社会主義者と揶揄された彼の政策は(富裕層への増税、公立大学の無償化など)は、高い学費(学生ローン)に苦しむ多くの若者から

³ 差別や偏見を含む表現をおこなわないこと

⁴ <http://www.esquire.com/entertainment/a/46893/double-trouble-clint-and-scott-eastwood/>

日本語訳

http://www.huffingtonpost.jp/2016/08/05/clint-eastwood-donald-trump_n_11345598.html

⁵ 2000年以降に成人または社会人となった世代。デジタルネイティブでSNSなどに慣れている一方で、経済のグローバル化に伴う貧富の格差に直面した世代。

高い支持を得た。

しかし、ムーア監督は、サンダース氏を支持した若者が自分たちの思いを民主党候補となったヒラリー氏を通じて国政に反映しようとしていないと指摘する。若者の怒りの声は、「意気消沈」しており、サンダース支持者が積極的に投票行動をすることはないと予想した。

オバマ大統領誕生の際には、熱狂的な若者の支持と行動があったが、ヒラリー氏は最後まで若者の心を掴むことができなかった。若者がオバマ政権に失望していたという不利もあったが、若者に未来を示すことができなかった。

⑤ ジョシー・ベンチュア効果

ムーア監督は、プロレスラーのジョシー・ベンチュア氏がミネソタ州知事に選ばれたことを引き合いに、病んだ政治体制の怒りに対する「有権者の何かしでかしてやろうというパワーを過小評価してはいけない」と指摘する。彼らは「パパやママをこまらせてやろうっていうくらいの気持ち」で現状を打破するためにトランプ氏に投票するのだという。

日本でもかつて民主党政権を誕生させた熱狂や大阪維新の会の躍進を支えた民意はこれに近いと言えるだろう。

3. ローカル経済の発展に向けて

イギリスやアメリカで起きた国民の“反乱”の背景には、政治がグローバル経済の恩恵を受けない大多数の国民(特に中流階級や若者)の不満や不安を解消できていないことにある。日本では、期待した民主党政権に裏切られたこともあって、現政権(安倍政権)への支持は高いが、アベノミクスのトリクルダウン戦略で日本経済全体が良くなることは証明されつつある。

政治は、国内を主戦場にする非グローバル経

済(ローカル経済⁶)の発展やそこで働く人々の幸せを一層真剣に考える必要があろう。円安や株高誘導ではないローカル経済のための経済政策も重要だ。ローカル経済の雇用はジョブ型が多いため、メンバーシップ型とは異なる雇用イメージを持って労働政策を考える必要もあるだろう。

また、ローカル経済は公共サービスに関する事業も多い。税制と一体となった議論が必要であるが、保育や介護などで働く人々がポジティブなキャリアビジョンを描けるような制度の構築も急務である。日本のGDPと従業員の約7割は、ローカル経済で働く人々である。このボリュームゾーンの活力を高めないと日本全体は元気にならない。トランプ氏の保護主義的な発言は、ローカル経済で働くボリュームゾーンを元気づけるのが狙いだった。

しかし、“グローバル VS ローカル”、“金持ち VS 大衆”などの二項対立の構図には注意が必要だ。対立を煽って国民を分断してはいけない。グローバル企業をバッシングしてもローカル経済が好転することはない。他国のグローバル企業にシェアを奪われるだけだ。また、ローカル企業に対する過度な保護政策も企業の新陳代謝の妨げになるためマイナスだ。ブラック企業やゾンビ企業を無くし、より生産性の高い企業を作っていくことも大切だ。

ローカル経済の課題は、短期間で成果を上げることが難しいものも多いだろう。しかし、ローカル経済の課題を着実に解決していくことが、これからの先進国の首脳には求められている。

⁶ 富山和彦(2014)「なぜローカル経済から日本は甦るのか」(PHP 研究所)ローカル経済に関する考えは本書を多いに参考にした。

★★周旋家日記 21★★

「キャリア形成について考える⑩
ーAI(人工知能)からBI(ベーシック・
インカム)へ」

乾明紀

1. 企業の将来性

大学 3 年生の春休みは、卒業後の進路を決めるための大切な時期である。2 月には実質企業説明会と化したインターンシップや業界研究会があり、3 月には正式な会社説明会が始まる。筆者も 3 年生ゼミを担当しているため、就職支援も重要な職務になっている。キャリア形成学科というところに籍を置いているため、伝統的な学部学科教員よりその責任は重いような気もする。

しかしながら、この時代の就職支援は非常に難しい。先日 5 名程の学生を指導したが、うち 4 名が企業選択に重視する基準は「将来性」だという。その基準は決して間違っていないのだが、技術革新のスピードがここまで早くなると企業の「将来性」を予測することは容易ではない。また、人工知能 (AI: Artificial Intelligence) の進化に伴うビジネスの変化は、労働者にとって悩ましい問題を突き付けてくる。

3 年ほど前「THE FUTURE OF EMPLOYMENT: HOW SUSCEPTIBLE ARE JOBS TO COMPUTERISATION?」¹という論文が話題となったが、その論文によれば、次のような仕事は、10～20 年後になくなるという。

¹ 原典はこちら。

http://www.oxfordmartin.ox.ac.uk/downloads/academic/The_Future_of_Employment.pdf

日本語での解説はこちらが詳しい。

<http://www.worksight.jp/issues/609.html>

<http://gendai.ismedia.jp/articles/-/40925>

銀行の融資担当者
保険の審査担当者
給与・福利厚生担当者
レジ係
レストランの案内係
ホテルの受付係
スポーツの審判
動物のブリーダー
電話オペレーター
カジノのディーラー
ネイリスト
仕立屋(手縫い)
時計修理工
彫刻師
苦情処理・調査担当者
メガネ、コンタクトレンズの技術者
義歯制作技術者
訪問販売員
露店商人
壁紙貼り職人 など

果たしてどうだろうか。実はすでに予想どおりの方向に世の中は動いていると言える。例えば「銀行の融資担当者」と同じことを、ジャパンネット銀行が AI で行くと昨年 10 月に発表した²。それによると、AI で中小企業の資金取引や業績を確認・分析することで、即日融資が可能になるという。

また、「レジ係」については、すでにイオンやイトーヨーカ堂でセルフレジを実現しているが、Amazon がレジを無人化したコンビニ“Amazon GO”を今年の早い段階にオープンする予定であることを発表した。どのような運営イメージかは、ぜひ次の

² 2016 年 10 月 25 日付 日本経済新聞電子版
<http://www.nikkei.com/article/DGXLZO08745070U6A021C1EE8000/>

URL で確認いただきたいが、複数のカメラによる

<https://www.amazon.com/b?ie=UTF8&node=16008589011>)

画像認識とスマホ等との連動によって商品確認と決済がおこなわれ、顧客はレジに並ぶことなく、ストレスフリーで商品を購入することができる。

この仕組みを導入する際の設備投資額を筆者は知らないが、経営者が人件費より安いと判断すれば、スーパーやファストファッションなどの小売店の多くが、こぞってこのシステムを導入することになるだろう。そうすれば、小売店の雇用環境は劇的に変わることになる。

この他、「義歯制作技術者」や「彫刻師」などの造形関連の職種も3D プリンターの影響を受けることは確実だ。また、「スポーツの審判員」は、すでにテニスのウインブルドン選手権で、複数のカメラと映像処理システムからなる「ホークアイシステム」が審判補助システムとして導入されている。スポーツの領域は、無人性に対する抵抗感もあるだろうが、有人性より確実性という価値観が勝れば、この領域の無人化も一気に進むだろう。

このように、様々な分野の仕事が、技術革新や AI 導入によってここまで変化しているのである。

2. AI から BI へ

法則性が明確な仕事や AI が学習できる程度の複雑性しかもたない仕事は、順次機械に置き換わっていく。

もちろん、仕事内容によっては、無人化の是非が議論されることもあるだろう。例えば、歴史ある相撲の行事がロボット審判だと、さすがに興ざめする。彫刻も人間が彫るからこそ生じる価値がある。機械に勝る価値を社会に提案し、社会がそれを認めれば、その仕事は有人として今後も存続して

いくだろう。優れたビジネスモデルや技術を開発する仕事が機械に置き換わることもまずない。

また、機械導入費用よりも人件費の方が安価であり続けることができれば、その仕事も有人として残っていくだろう。しかし、これらの仕事の大半の報酬は決して高くはない。

つまり、AI が一層進化した社会で報酬を得るということは、優れた価値を提供できる人になるか、安い報酬でも厭わない人になるかしかない。かつて一億総中流と言われた時代があったが、日本の未来は、大きく二極化した社会になる可能性が高い。もし、そうであれば、AI の進化より早いスピードでベーシックインカム (BI) の導入を検討する必要があるのではないだろうか。

BI とは、資産や稼働能力の有無に関わらず、公共機関から金銭が定期的に個人に給付される制度である³。これが適切な給付水準で実現されれば、仕事の報酬が低くなっても生活を保障することができる。また、収入を心配することなくクリエイティブな取り組みに積極的に挑戦することもできる。さらに、収入の有無や報酬の多寡に関係なく“やりたい仕事”に従事することもできる。

幸いにも現在の日本は、技術革新のスピードより少子高齢化のスピードが速いため、今すぐ失業者が増えるということはない。だからこそこの猶予の期間に BI について真剣に議論すべきではないだろうか。学生の就職指導をしていてそのようなことを考えた。

³ 参考文献：山森亮 (2010)「ベーシック・インカム入門」光文社

★★ 周旋家日記 22 ★★

「キャリア形成について考える⑪」ー コミュニティ意識

乾明紀

1. 若者とコミュニティ意識

ご縁があって今年度からシチズンシップ科目で一緒にすることになった某先生は、企業に就職されたことが一度もなく、大学卒業後から一貫して地域コミュニティをフィールドにソーシャルビジネスで生計を立てていらっしゃる。このような職業キャリアに至った経緯をお聞きすると、就職氷河期だったことが企業に頼らないキャリア形成につながったという。

ここでいう就職氷河期は、リーマンショックなどの金融危機の影響によるもの（第二次就職氷河期とも呼ばれる。第一次はバブル崩壊後）であるが、このころの日本は東日本大震災も重なり、社会も経済も先行きは明るいものではなかった。そのような状況の中で、コミュニティの課題解決とビジネスを両立するという新しい働き方・生き方に挑戦した某先生は、ソーシャルアントレプレナーとしての覚悟があった。

さて、地域コミュニティをキャリア形成のフィールドにする某先生のような若者がいる一方で、地域活動の基盤となる自治会・町内会などの加入率は低下していると言われている（総務省、2014）¹。主な要因としては、地域で暮らしながら商売をしていた自営業者の減少や活動に拘束されることを嫌がる人が増えたことなどがあげられる。

京都市では自治会活動を活性化しようと、

2012 年に「京都市地域コミュニティ活性化推進条例」を施行し、今年の 3 月には大学に入学する学生に自治会加入を呼び掛けるチラシ²まで作成した。このような呼び掛けがどれほどの効果を持つかわからないが、某先生と一緒している科目で、学生のコミュニティ意識についてアンケートをおこなっているので、本稿ではその結果を簡単に紹介することとしたい。

2. コミュニティ意識調査の方法

この調査には石盛・岡本・加藤（2013）³が開発した「コミュニティ意識尺度（短縮版）」を用いた。この尺度は、地域における行政の役割や市民の主体性の発揮に関する意識も測定できるように設計されており、次の4つの因子で構成されている。1つは「連帯・積極性」因子であり、積極的にみんなと協力しながら地域のために活動するかどうかに関するものである。2つ目は「自己決定」因子であり、地域を良くするためには市民自らが決定権を持つことが重要であると考えるかどうかに関するものである。3つ目は「他者依頼」因子であり、行政や他の熱心な人に地域の問題への取り組みを任せて良いと考えるかどうかに関するものである。4つ目は「愛着」因子であり、地域への誇りや愛着の有無に関するものである。

本調査は、筆者らが所属する大学（A 女子大学）の初年次必修科目「シチズンシップ」を受講する学生を対象に4クラスで実施した。第2回授業時に学生に協力を依頼し、学生は学習管理システム（Learning Management System）上のアンケート機能を使って回答した。アンケートの回答期間

¹総務省（2014）「今後の都市部におけるコミュニティのあり方に関する研究会報告書」

http://www.soumu.go.jp/main_content/000283717.pdf

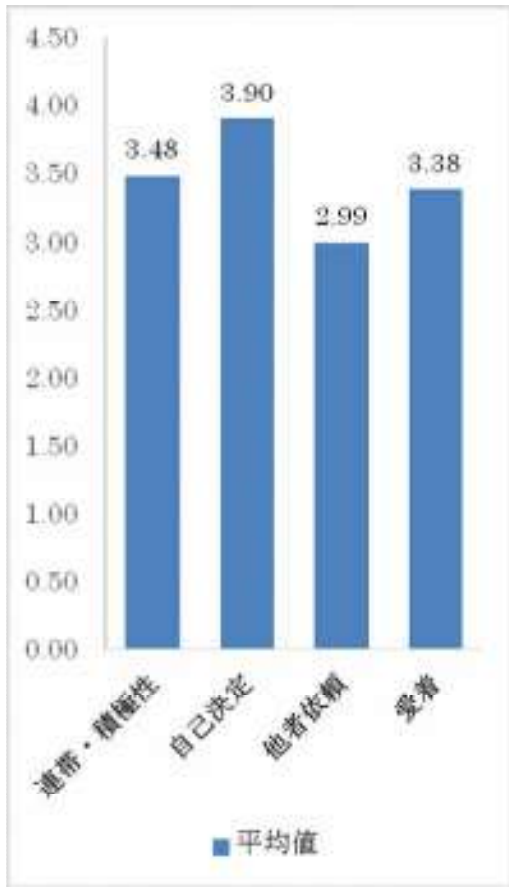
²<http://www.city.kyoto.lg.jp/bunshi/page/0000196570.html>

³ 石盛真徳, 岡本卓也, 加藤潤三（2013）コミュニティ意識尺度（短縮版）の開発。実験社会心理学研究 53(1), 22-29

は、4月中旬から5月上旬とした。授業登録学生のうち、354名が回答し、有効回収率は88.5%であった。

3. 結果

アンケートを集計した結果、「自己決定」因子が最も高いことがわかった(図1)。



【図1】A女子大学の学生のコミュニティ意識

また、今回の調査結果を石盛(2009)⁴がおこなった京都市での調査結果の20代女性と比較⁵して

みると、A女子大学の学生は、「連帯・積極性」因子が高いことがわかった(表1)。

	連帯・積極性	自己決定	他者依頼	愛着
A女子大学1年生	3.48	3.90	2.99	3.38
京都市20代女性	3.04	3.92	2.94	3.35
t検定	**			

【表1】A女子大学1年生と京都市20代女性のコミュニティ意識比較

**：P<0.01

市民性を養う「シチズンシップ」という科目を同じ学科に所属する学生らと受講していることが影響しているかもしれないが、みんなと協力しながら地域のために積極的に活動しようとする学生が多かった。この意識は大事に育てていきたいものである。

実は、本稿で紹介した調査は、シチズンシップの授業内容が学生のコミュニティ意識に影響を与えているかを確認するために実施したものであり、授業の効果を計るためのプレ調査部分である。授業を通してコミュニティ意識は変わるのか、学生をどうやって地域活動とつなげていくのか、このあたりを明らかにしていきたいと考えている。しっかりポスト調査もおこない、研究成果を発表していきたい。

つづく

⁴ 石盛真徳(2009)大都市住民のコミュニティ意識とまちづくり活動への参加ー京都市における調査から(1)ー。コミュニティ心理学研究 13(1), 21-36.

⁵ 石盛(2009)の調査は短縮版でないため、石盛先生に短縮版での項目に再計算したデータをいただいた。この場を借りてお礼申し上げます。

★周旋家日記 23★

キャリア形成について考える⑫

“ソーシャル・・・”

という選択

乾明紀

1. オルタナティブな選択肢の提供

今年度後期から「ソーシャルマネジメント原論」と「ソーシャルビジネス」の2科目を新たに担当することとなった。筆者が所属するキャリア形成学科は、文字通り学生のキャリア形成に資する学びを提供することがミッションであるため、これらの科目は、公務員や後述の社会的企業（ソーシャルエンタープライズ）などの出口を意識してのことである。

しかし、国内外の社会変化を眺めれば、全ての若者に受講してほしい科目である。それは、我々が社会変化の被害者にも加害者にもなる可能性があるからである。快適さや利便さの追求は、社会や経済の発展に寄与する一方で、地球温暖化や放射能汚染などに代表されるような我々のコントロール能力を越えた問題を引き起こしたり、グローバル規模で児童労働や安全軽視の労働を生んだりしている。

このような現代社会にどう対応すべきかの根底には生き方の価値観があり、キャリア形成に少なからず影響を及ぼす。発展する資本主義社会の中で日常生活を送っている若者に対し、オルタナティブな選択肢（代替案）を提供することを科目のミッションにしたいと考えている。利益最優先の企業にとっての都合の良い職業人や消費者に仕立てられないためにも彼女たちに新たな視点を提供することは重要であろう。

2. ソーシャルマネジメント

「ソーシャルマネジメント原論」は、主に利潤よりも社会問題の解決を目的とした活動を紹介するものである。現在のところ、「ソーシャルマネジメント」という概念に普遍的な定義は存在しておらず、この科目では、「社会や地域の問題・課題を解決し、より良い社会を創ろうとする活動」と広く定義することとした。

内容的には、公共セクターや市民セクター（市民社会）の活動だけでなく、企業セクターや親密圏（家族）の注目される取り組みも紹介することになりそうだ。そう考えると、目的に「利潤と社会問題の解決の両立を目指す活動」を含めたり、定義の中に「家族」という言葉も含めたりして、対象範囲をもう少し大きくした方がよかったかもしれないが、主に紹介する内容は、地方自治体や台頭著しい市民社会の活動にする予定である。

この科目が、社会問題とその解決方法への関心を高め、同じく後期開講の「ソーシャルビジネス」や次年度開講の「まちづくりデザイン」や「企業の社会的責任」などの科目で、各論への理解を深めて欲しいと考えている。

3. 変化する公共セクターと注目を増す市民社会

バブル経済崩壊以降の低成長経済と少子高齢化の進展は、財政赤字を拡大させ、公共セクターの政策を「福祉国家」¹的なものから「新自由主義」²的なものに転換させることとなった。

新自由主義的な政策では、公共サービスの民営化、規制緩和、行財政改革などがおこなわれ「小さな政府」を目指すこととなる。これにより、課

¹ 資本主義の欠陥（市場の失敗）によって、人間らしく生きることのできない状態が生じた場合に、国が積極的に介入し是正していこうとする考え

² 政府の民間への積極的な介入に反対する考え

題であった財政再建が成功したり、公共部門に民間企業の手法や感覚が取り入れられたりすることになった。公務員の中に「公民起業家」³や「スーパー公務員」⁴が登場したり、京都市の「まちづくりアドバイザー」⁵のようにソーシャルデザインの専門性をもった契約職員も誕生したりした。これらの公務員が注目されるようになったのも政策の転換があったからこそのことである。

また、公民連携⁶やソーシャルビジネスなども広がりを見せており、新たな産業創出への期待も高まっている⁷。

政策転換により、このような成果がある一方で、福祉・医療・教育などの公共サービスは縮減されており、新たな問題も顕在化するようになった。このような問題の顕在化と解決に NPO やボランティアなどの「市民社会」の活動は欠かせないものとなっている。

坂本(2017)⁸によれば、市民社会には「アドボカシー」、「サービス提供」、「市民育成」の3つの機能がある。アドボカシー機能とは、政府や世論などに対して問題やニーズの所在を明らかにすることであり、サービス提供機能は有償・無償に限らず多様な方法で問題解決のための財・サービスを提供することである。市民育成機能は、NPO やボランティアなどの活動に参加することで、豊かなソーシャル・キャピタル(社会関係資本)⁹が醸成され、「善

き市民」が育成されていくというものである。

この3つの機能を通じて、政府・企業・家族などが解決できない問題を解決しようとする市民社会の活動もソーシャルマネジメントであると筆者は捉えている。

3. ソーシャルビジネス

ソーシャルビジネスとは、「社会的課題の解決を国の政策や税金を使わずに、民間がビジネス手法を使って解決すること」(米倉, 2010)¹⁰である。このような活動をしていれば、NPO や一般社団法人であっても、また、医療法人や協同組合であってもソーシャルビジネスと呼ぶことができる(平田, 2012)¹¹。さらに、純粋営利企業である株式会社であっても、目的が社会的課題の解決であればソーシャルビジネスと呼ぶことができる。

例えば、首都圏で病児保育問題の解決を目的として活動している「フローレンス」¹²は、認定特定非営利活動法人(認定 NPO 法人)である。一方、中山間地域である徳島県勝浦町上勝町で、高齢化と産業衰退の課題を解決することを目的に「ツマモノ」の生産と販売(「葉っぱビジネス」と呼ばれている)をおこなっている「いろどり」¹³は株式会社である。

このように、組織形態は純粋非営利組織から純粋営利組織までの間のさまざまな形態がある。

このようなソーシャルビジネスをおこなう活動主体は、ソーシャルエンタープライズ(社会的企業、社会志向企業)とも呼ばれており、谷本ら(2006)¹⁴は、組織形態を図1のように整理している。

³<http://www.cc.kyoto-su.ac.jp/~k3833/civic-entrepreneur.html>

⁴<https://www.sotokoto.net/jp/interview/?id=136>

⁵<http://www.city.kyoto.lg.jp/bunshi/page/000130290.html>

⁶<http://www.city.kobe.lg.jp/information/project/innovation/kobeppp/buildppp.html>

⁷http://www.meti.go.jp/policy/local_economy/sbcb/

⁸ 坂本治也編(2017)『市民社会論 理論と実証の最前線』法律文化社

⁹ * * * * *

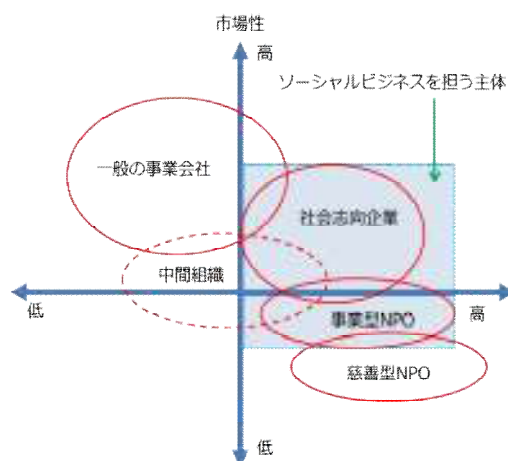
¹⁰ 米倉誠一郎(監修)竹井善昭(2010)『社会貢献でメシを食う』ダイヤモンド社

¹¹ 平田譲二編『ソーシャルビジネスの経営学』中央経済社

¹²<http://florence.or.jp/>

¹³<http://www.irodori.co.jp/>

¹⁴ 谷本寛治編(2006)『ソーシャルエンタープライズ 社会的企業の台頭』中央経済社



乗り越えていくのかを知ることは、ソーシャルビジネス研究の最も面白いところである。起業家のビジョン（将来像）や思い（理念）、商品やサービス内容、仕組みや仕掛けなどを通じて、どのように社会が変革しているのかを、学生と一緒に私自身も学んでいきたいと考えている。

日記はつづく

図1: ソーシャルエンタープライズの組織形態

出所: 谷本編 (2006) より

4. ソーシャルアントレプレナーとソーシャルイノベーション

ソーシャルビジネスが、社会問題を解決すると同時にビジネスとして成立し続けること（社会性と事業性の両立）は容易ではない（大室, 2016）¹⁵。それは市場規模が小さいことやサービスへの対価が得にくいことが理由にある。また、資金や人材などのリソースが得にくい、コストや価格が高くなってしまうという課題もある。さらに、消費者や生活者が、ソーシャルビジネスを通じた社会問題の解決に関心が低いという現状もある。例えば、我が国のフェアトレード商品の売上額は、西ヨーロッパ諸国や北欧諸国に比べるとかなり少ない¹⁶。

社会性と事業性に加え、このような状況を打破するイノベーション（革新性）を発揮できたものが、ソーシャルビジネスだという指摘もある（谷本, 2006）。ソーシャルアントレプレナーと呼ばれる起業家が、この難しい課題にどうチャレンジし、どのように

¹⁵ 大室悦賀 (2016) 『サステナブル・カンパニー入門』学芸出版社

¹⁶ Fairtrade International
https://www.fairtrade.net/fileadmin/user_upload/content/2009/resources/2012-02_Fairtrade_ByTheNumbers_2009-11.pdf